徳島県博物館紀要

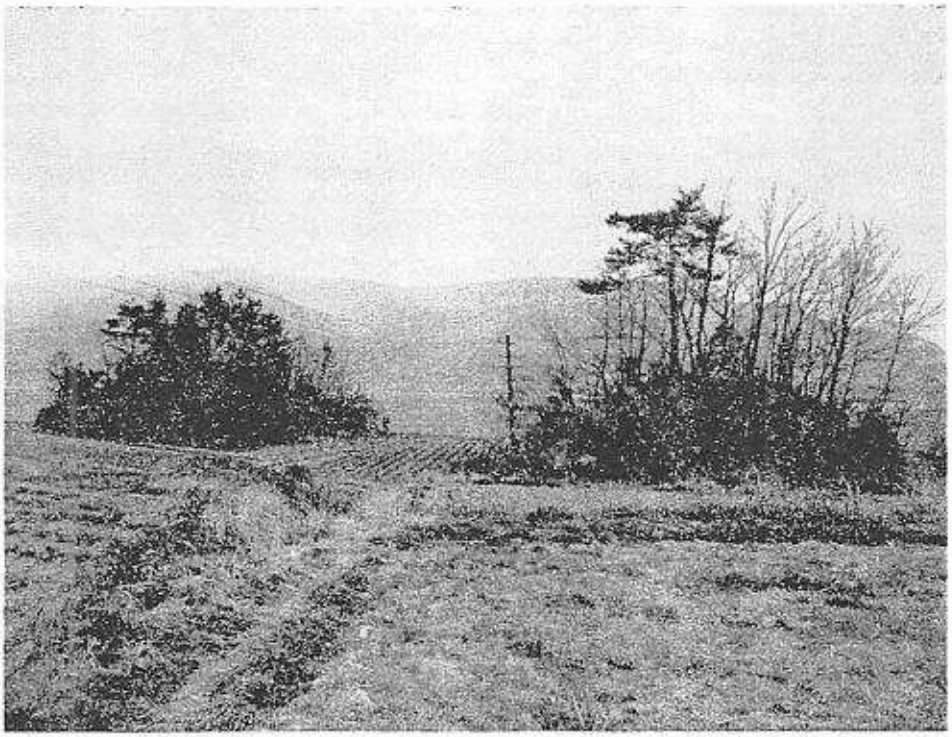
第４集

昭和４７年度

徳島県博物館

徳島県博物館紀要

第 4 集



昭和47年度

徳島県博物館

目　次

徳島県下における横穴式石室の一様相

学芸員　天羽　利夫

はじめに……1
1．調査報告……2
2．横穴式石室に関する二，三の問題…25
付編　徳島県下の横穴式石室一覧……32
文献目録……38

扉写真は北側よりみた段ノ塚穴

徳島県下における横穴式石室の一様相

学芸員　天　羽　利　夫

はじめに

徳島県博物館では，館活動として昭和45年度から遺跡実測調査を実施してきた。この調査研究は，県指定となっている古墳を中心に実測調査を行ない，研究及び展示活動の一助にすることが目的で始められたものである。

現在までに実施した調査は，つぎのとおりである。

昭和46年3月	県指定	宝憧寺古墳
〃　46年8月		穴不動古墳
〃　47年2月	県指定	矢野の横穴式古墳
〃　47年8月		観音山古墳
〃　48年2月	県指定	弁慶の岩窟
〃　48年3月	国指定	段ノ塚穴・棚塚

この調査を始めた時点をふりかえってみると，県内の古墳研究は全国的な研究に比してあらゆる点でかなりの遅れが指摘できる。たとえば，県指定となっている古墳のほとんどは実測図さえなく，また県内の古墳分布にしても十分な把握ができていない状態であった。

徳島考古学研究グループが，昭和45年度徳島県博物館建設記念学術奨励金交付により行なった「渋野古墳群の研究」は，こうした現状をふまえ，遺跡の実測と分布調査を基本として取り組んだ最初のものであった。同グループは，つづく昭和46年度にも同奨励金の交付をうけ，「気延山周辺における考古学的研究」をテーマに2年間にわたる研究活動を行ない，その成果はきわめて大きいものがあった。

当館が実施した実測調査も，こうした県内の研究活動の方向と無関係のものでない。今なお痛感することは，この種の基本的な調査活動の必要性である。当館では，48年度も段ノ塚穴・太鼓塚の調査を引き続き予定している。

ここに，いままでに実施した調査の報告を行ない註(1)，それをもとに県内の横穴式石室に関する諸問題をさぐってみたい。

調査にあたっては，徳島考古学研究グループの会員諸氏や各土地所有者ならびに各市町村教育委員会の方々には惜しみないご協力をいただいた。また，本稿執筆に際し，三木文雄，近藤義郎，水野正好，渡辺誠の諸先生にはご指導や文献のご配慮を賜わった。特記して感謝する次第である。

註(1)　宝憧寺古墳については，前方後円墳（埋葬施設不明）であり，本稿ではふれない。つぎの文献を参照されたい。
立花　博「遺跡調査概報―宝憧寺古墳の実測―」『徳島県博物館館報』12号　1971年

1. 調　査　報　告

1. 穴不動古墳

所　在　地　徳島市名東町1丁目

所　有　者　地蔵院（現住職　近藤信教）

調査期間　昭和46年8月10日～14日

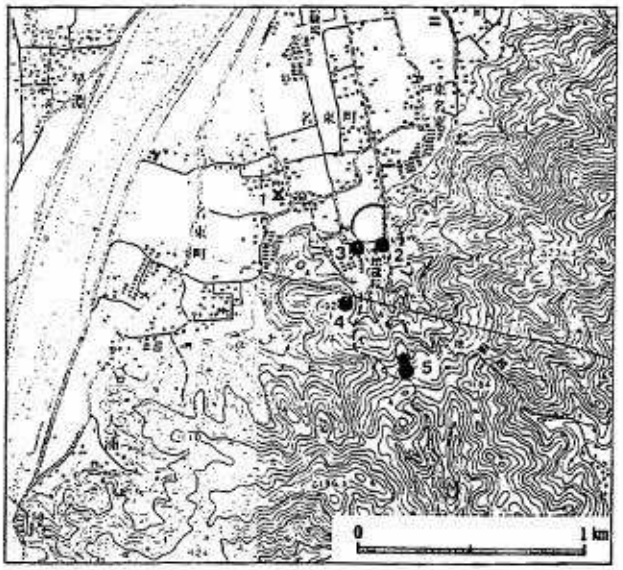
調査協力　石川　重平・岡山真知子・喜多　明敏・小林　勝美・近藤　誠介・中原　節子
萩森　清見・松崎　みさ・松永　住美・三井　淳子

遺跡の位置

穴不動古墳は徳島市の西部，眉山山塊の西麓にある地蔵谷の入口近くにある。古墳が地蔵院境内にあるせいか，古墳の周辺はよく整備されている。そのため，かえって古墳築造時の地形の面影をまったくなくしてしまっている。周辺部の地形から推定して東側尾根から西に傾斜する谷沿いの斜面に築造したようである。石室がいつ開口されたか知る人もなく，遺物も今日まで伝わっているものはない。

山門のすぐ北側は「名方池」通称地蔵さんの池があって，平野部に接する。古墳と平野部との比高は，10mあまりであろう。

この名方池の北側約400mの位置にある日枝神社周辺一帯は，弥生時代後期から古墳時代にかけての大集落が推定されている。また，地蔵谷周辺には，穴不動古墳のほかにもいくつかの古墳が知られている。名方池の東岸，平野部から地蔵院に通ずる道路端に横穴式石室の奥壁とみられる一枚石が立ったまま残されている。また，池の西側の尾根上には，名東遺跡に関連して古式の節句山1号・2号墳がある註(1)。そして，節句山古墳群と谷を隔てた東斜面の山腹には両袖式の横穴式石室をもつ「うばのふところ」古墳がある。また，節句山古墳群をさらに登りつめた標高約130mのところに全長60mの前方後円墳「八人塚」（積石塚）がある。このほか，数基の組合式箱形石棺も確認されているが，今後の調査で名東遺跡に伴なう墳墓群発見の可能性も期待されている。



第1図　穴不動古墳と周辺の遺跡（2万5千分の1，『徳島』）
1．名東遺跡　2．穴不動古墳　3．節句山1·2号墳
4．うばのふところ　5．八人塚

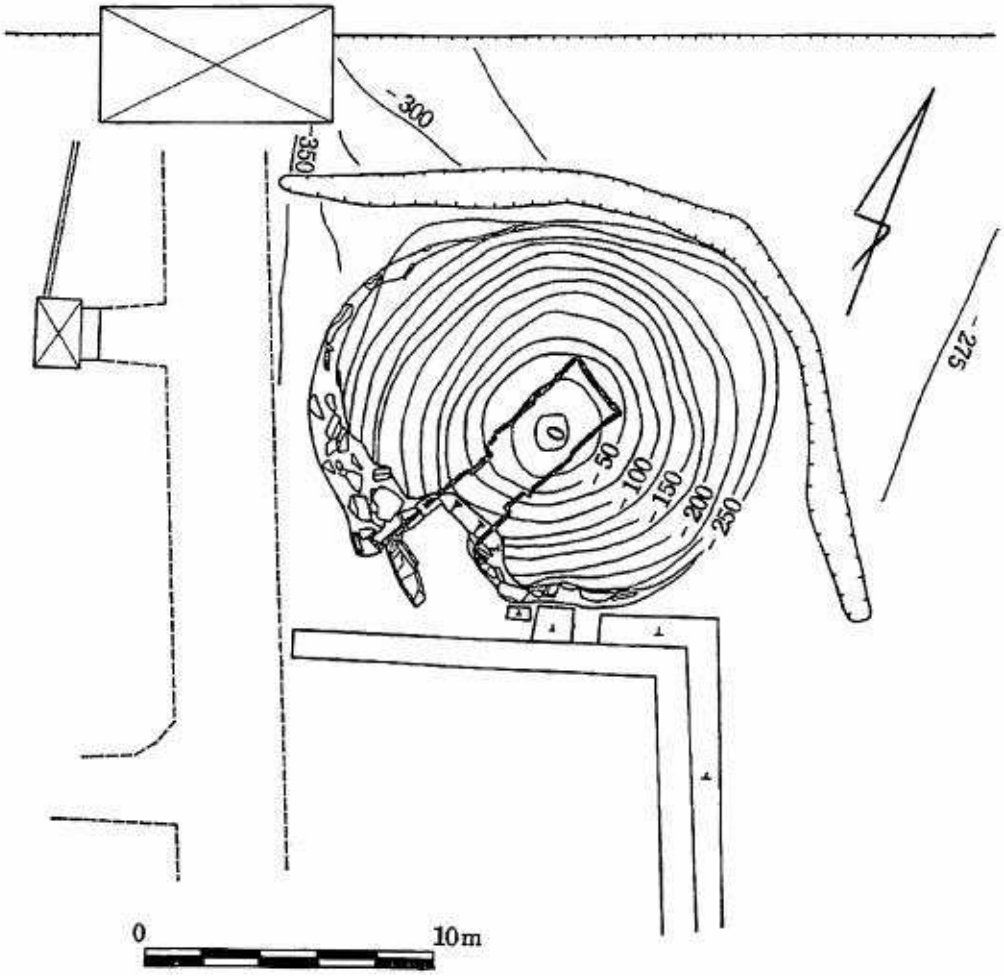
註(1)　末永　雅雄・森　浩一『眉山周辺の古墳』徳島県文化財調査報告書　第9集　1966年

墳丘とその現状

寺院境内にあるためか，雑草や雑木の生い茂ったいつも見られる古墳の様相とちがって，墳丘はきれいに整備されている。墳頂部には石塔が建てられていて，北斜面に樹令のかなりたった松がそびえているのが印象的である。

墳丘はあまり荒らされた様子もなく，封土の流れも見られないが，整地されているため裾の部分は不自然である。とくに石室入口周辺から墳丘裾に石積みがめぐっている。この石積みが，古墳築造時の施設であるかどうかは今後の課題である。また，東側から北側を一周する巾１ｍぐらいの溝は，後に掘られた排水溝である。

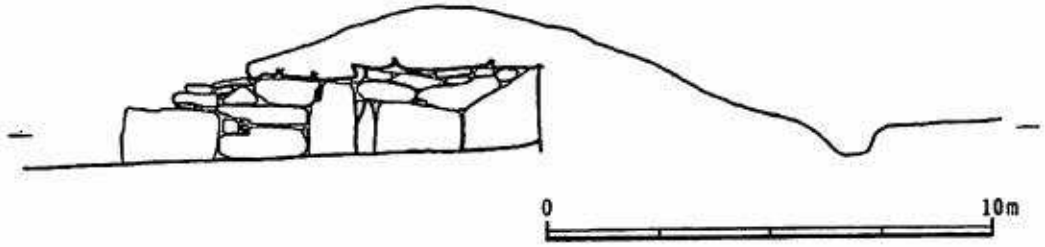
現状で墳丘を測定してみると東西で16m，南北で14mである。正確な復元はできないにしても，封土の残りぐあいや石室のあり方などを考慮し，玄室中央部を墳頂と仮定して直径16mの無理のない円



第2図 穴不動古墳の墳丘

墳が復元できる。

墳丘と現地表面との比高は，東側・北側とも３ｍ，西側で３ｍ50cmであり，封土の流れや現地表面の変化を考えてみても，大体４ｍ前後の高さと推定できる。



第3図　穴不動古墳墳丘断面図

石室の規模と構造

石室は両袖式の横穴式石室である註(1)。その特徴は，一口にいって巨石墳という形容に値する。全長9.3ｍの長大な石室は県内では最大級に属する。

石室は墳丘のほぼ中央に築かれ，寺院境内の中央，つまり平野部とは逆の谷状地形の奥に向って開口している。入口は，２ｍあまりの一枚石が塞ぐ格好となり，そのため，石室へは右側から廻って入らなければならない。この石は，あとで述べるように左側壁に使用していたもので，石室を閉塞したものではない。

現在，玄門部に格子戸が設けられ，不動尊を祀ってある玄室へは自由に出入りできない。このことが，かえって石室内部の保存に役立ったようである。玄室の床面には，こぶし大の円礫がごろごろしており，床に礫を敷きつめた可能性が考えられるが，羨道にはそれが見当たらない。石室内部への二次堆積の土砂はほとんどなく，床面はほぼ水平である。

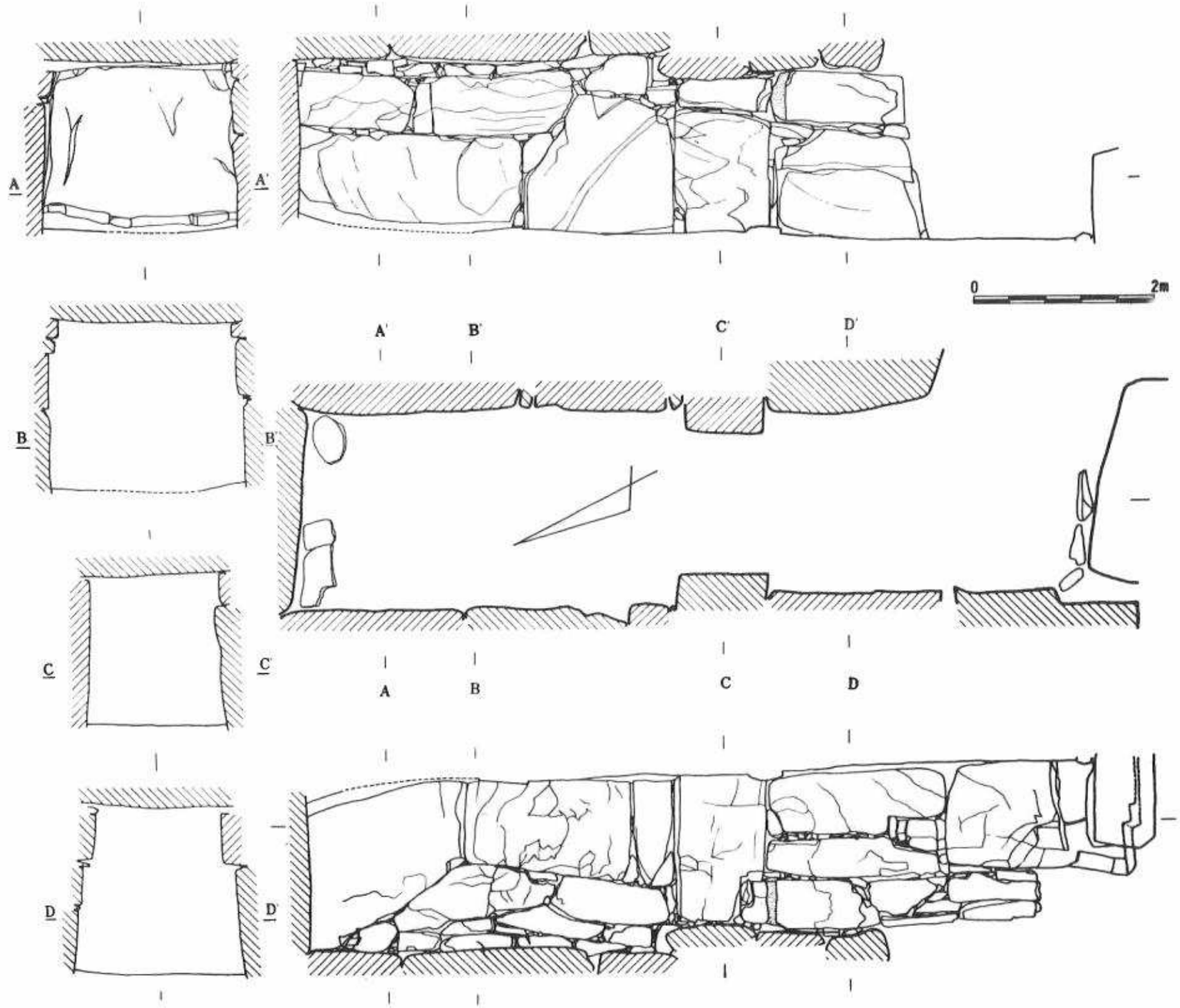
石室構築の用材は，緑泥片岩ないしそれに類する片岩系統の巨石ばかりで，平坦面を壁面として利用している。また，これらには河川での浸食を受けた岩肌をありありと見せているものが多く，位置的にみて鮎喰川流域から持ち運んだものと推測できる。

玄室奥壁は，いわゆる鏡石として，巾2.2m以上，高さ1.9m以上の巨大な一枚石を使用している。この鏡石は左側が若干前にせり出していることに留意しておきたい。

玄室両側壁は，最下段に左右とも４個ずつの巨大な石（最大で2.2m以上）を横または縦に据え，二段目は１～1.5ｍ前後の石を平積みに，その上段，つまり天井に接する部分にはさらに小さな割石を平積みにして三段目を築いている。玄門部は，右側に一枚石を立て，左側は二段で構築している。羨道は，二段積みを基本とし，玄室に比べて石材は小さい。

これら側壁の横断面をみると，玄室および玄門部は天井までほとんど垂直であるが，羨道部は，床面の巾２ｍに対し，天井部の巾は1.4mと最下段から持送りの形式をとっている。

天井石は，玄室３枚，玄門部１枚，羨道部２枚を水平にかけている。玄室中央の天井石が最大で2.2ｍ以上，他の２枚は１ｍ前後である。玄門部も１ｍあり，羨道部の天井石はやや小さくなって



第 4 図　穴不動古墳石室実測図

80cm前後のを用いている。羨道部の天井は，側壁の長さから推定してあと３枚程度が不足している。石室内部の高さは，玄室が最も高く，玄門部で一段低く，羨道部がこれに並ぶ。この高低差は20cmである。

石室内のそれぞれの計測値は第１表のようになる。

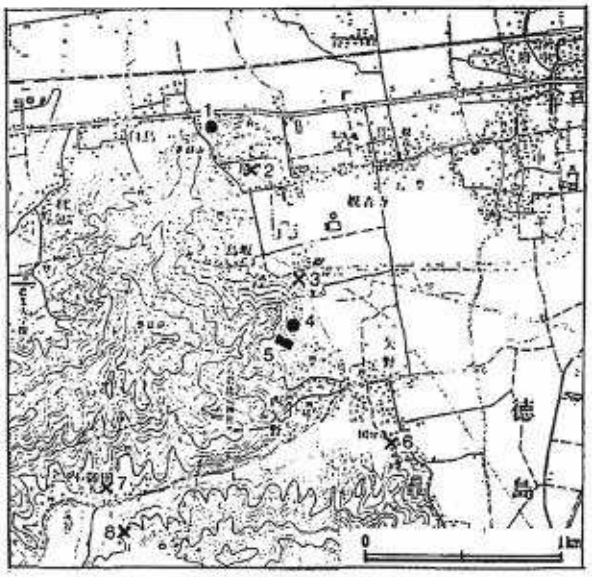
この数値からみると，玄室のプランは，長さと巾の比が２：１の長方形である。玄室と羨道との接続部には約１ｍのいわゆる玄門石を対称に配置して，玄室と羨道の境をなしている。玄室と玄門部との巾の差は1.2mで，左右それぞれ60cmの袖をつくっている。玄門石を境に羨道は再び広くなる。羨道は，玄室の規模を若干小さくした程度で，長さと巾の比も同じく２：１の長方形である。現状では，羨道入口で左側壁が右側壁に比べて短い。これは，先にふれたように，石室入口を塞いでいる巾2.3m，高さ1.0mの石をその部分に補なうとまったく左右同じ長さで復元できる。なお，奥壁に接して，高さ30cm前後の塁状の施設がみられるが，石室構築時の施設かどうか明らかでない。

全長		9.3m
玄室	長	4.3
	巾（中央）	2.2
	高（中央）	2.0
玄門	長	1.0
	巾	1.55
	高	1.7
羨道	長	4.0
	巾（中央）	2.0
	高（中央）	1.8

第1表　石室計測値

註 (1)　玄室と羨道部の巾がほとんど同じであるため，厳密な意味での両袖式といえるかどうか疑問であるが，ここでは玄室部に袖をもつという解釈でこの言葉を使用した。

2．矢野の横穴式古墳



第５図　矢野の横穴式古墳と周辺の主な遺跡

（２万５千分の１，『石井』）

1．尼寺1・2号古墳　2．国分尼寺址　3．矢野遺跡
4．矢野の横穴式古墳　5．奥谷古墳　6．国分寺址
7．内ノ御田瓦窯　8．内ノ御田須恵窯

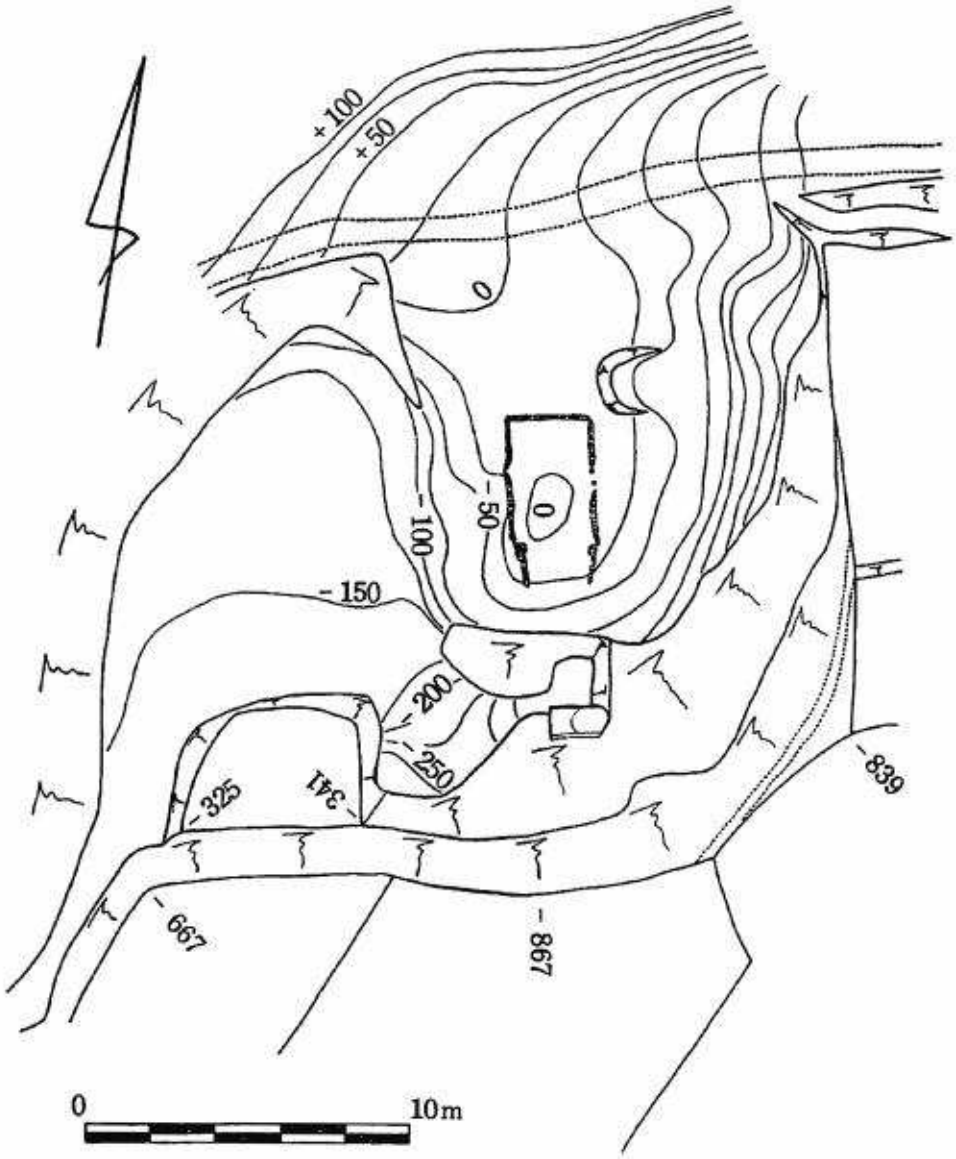
所　在　地　徳島市国府町西矢野山林39
所　有　者　吉内　洋
県指定年月日　昭和28年７月21日
調査期間　昭和47年２月29日
～３月９日
調査協力　石川　重平・岡本　坦
岡山真知子・騎馬　政美
小林　勝美・萩森　清見
松崎　みさ・三井　淳子
宮崎　和重

遺跡の位置

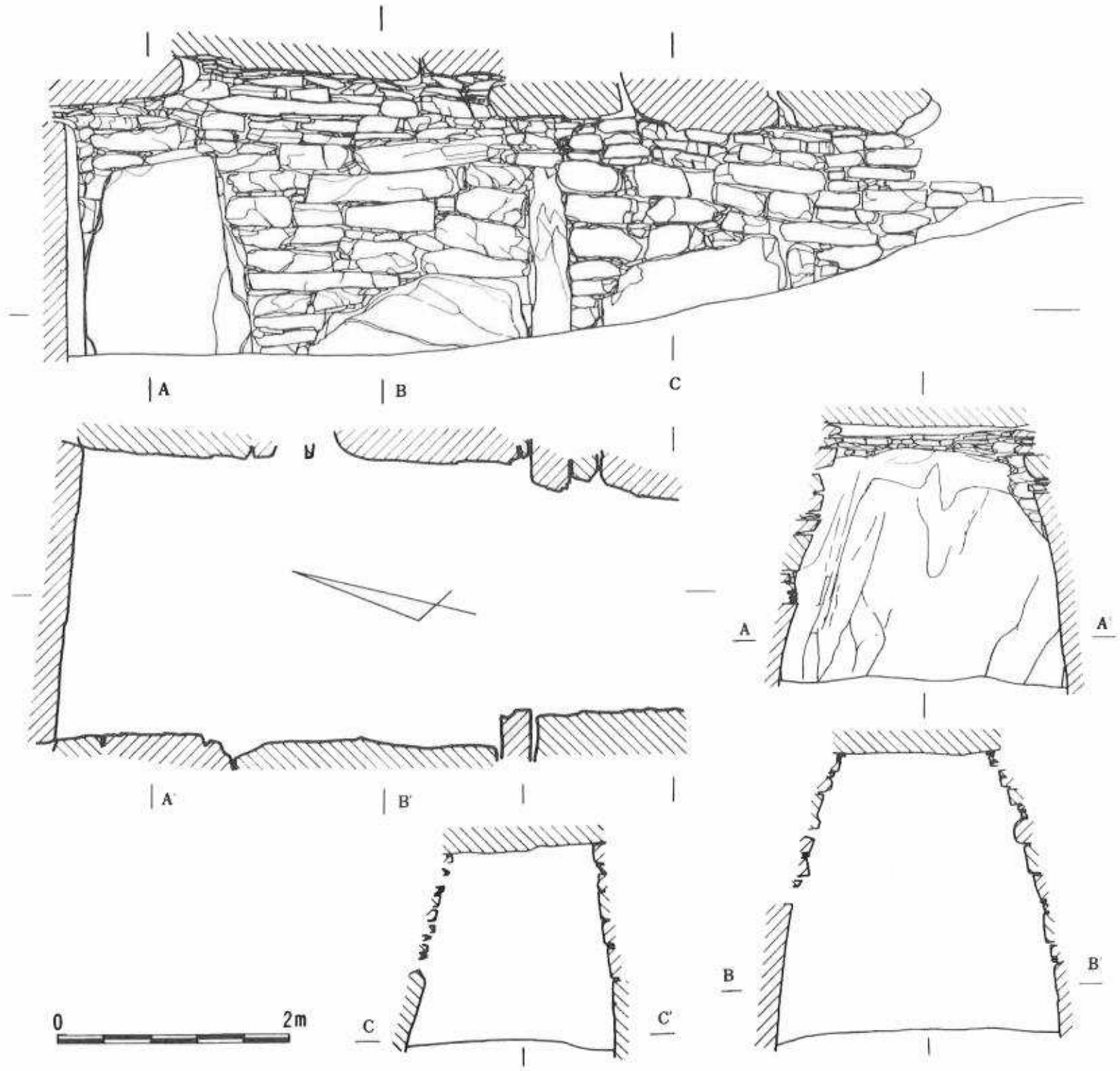
気延山東斜面は，もっとも古墳の集中している地域の一つであるが，そのなかでもっともよく知られ，小・中学生の古墳見学によく利用されているのが，県指定史跡「矢野の横穴式古墳」である。遺跡見学の目

標は，「国府変電所」にすると一番よい。この変電所周辺は，弥生時代後期の集落遺跡と考えられているところでもある。

この変電所を南へ少し抜けると，西側に通称奥谷と呼ばれる谷状地形が開けている。谷一帯が密柑畑となっているため，ぽつんと取り残されたように古墳が残っており，わかりやすい。この古墳の石室がいつ開口されたのか明確でなく，遺物も伝わっていない。また，この古墳と並んで数基の横穴式石室があったといわれるが，今はほとんど消滅してしまっている。谷を隔てて南側の尾根には，県下で唯一の前方後方墳である奥谷古墳（全長約55m）が横たわっている。



第６図　矢野の横穴式古墳の墳丘



第7図　矢野の横穴式古墳石室実測図

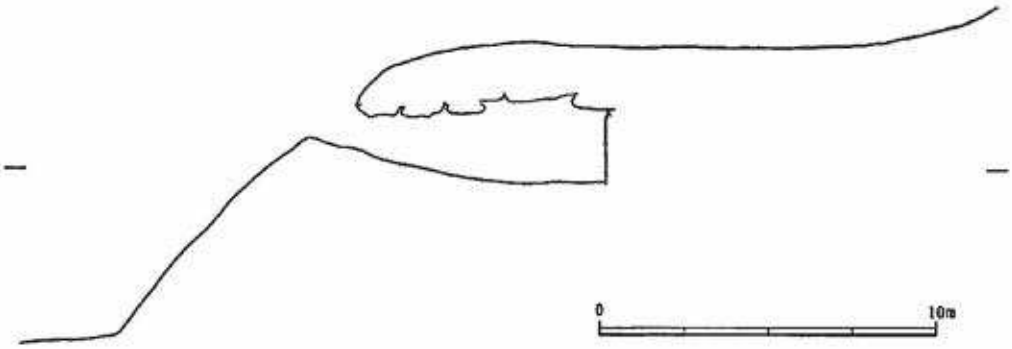
徳島考古学研究グループが昭和46年度に実施した分布調査によると，気延山東斜面だけでも前方後方墳１基，前方後円墳２基をはじめ65基の古墳が確認されている。今後の調査によって，その数はますます増加するだろう。気延山周辺は，これら古墳群だけでなく，弥生時代の集落遺跡や国分寺・国分尼寺址，また国衙推定地など県下の原始・古代を解明するには欠かせない重要な地域である。

墳丘とその現状

県指定史跡であるが，保存状態はきわめて悪い。戦後の開墾，また最近の密柑園造りなどによって，この奥谷一帯は段々畑になってしまっている。

この古墳もまわりから削り取られ，東側，そしてとくに南側は崖となっているので，石室入口周辺の高さと崖下の畑との落差は６ｍにも達している。西側はやや平坦な地形を呈しているが，これも旧地形ではなく開墾畑である。北側は山道が横切り，墳丘と自然地形との境界はまったく不明である。

したがって，墳丘測量をしてみると，まるで方形墳であるかのような形状を呈している。しかし，墳丘は三方から削り取られている痕跡がありありとうかがえるが，方形墳と考える積極的な根拠はなにもない。



第8図　矢野の横穴式古墳墳丘断面図

石室の規模と構造

両袖式の長大な横穴式石室である。穴不動古墳ほどには巨石墳ということはできないにしても，随所に２ｍにも及ぶ巨大な石を用いている点では共通する。

石室はほぼ南へ向って開口し，入口には天井石に使用したと思われる１枚石が今にも崖下に落ちそうである。石室内部には，二次的な土砂の堆積がみられ，入口近くでは身体を屈みながらでないと入ることができない。奥壁近くの床面と入口の堆積面との高低差は1.2ｍにも達する。土砂の堆積は，入口から玄門に至るまでの間で著しい。また，この古墳はときどき子供の遊び場になるらしく，玄室の床面があちらこちらで掘り返されている。床面には円礫はみられず，大小扁平にくだかれた石が無数に落ちている。これは側壁の石が抜きとられて放り出されたようである。本来の床面はまったく不明である。

奥壁は，巾2.5m，高さ２ｍ以上の一枚の巨石を用いているが，天井との間には二段ほど割石を積

んでいる。また，左側が若干前にせり出して据えられている。

玄室両側壁は，最下段に1.2m～2mの巨石をそれぞれ2個ずつ配置し，その上に何段にも割石を平積みにして天井部まで積み上げている。とくに奥壁と接するところの左側壁には，高さ1.7m，巾1.5mの巨石を立てているのが目立つ。

玄門石はいずれも立てているが，天井部までの高さが足りず，その間を二，三段同じように積み込んでいる。そして，天井部に近くなるにしたがい，床面でみられるような袖を形成しない。つまり，この立石は形式的に玄室と羨道部との境の役割りをはたしている。

全長		8.0m
玄室	長	3.8
	巾（中央）	2.4
	高（中央）	2.5
玄門	長	0.3
	巾	1.9
	高	1.9
羨道	長	3.9
	巾	—
	高	—

第2表　石室計測値

羨道部の様子はよくわからないが，玄門石に接するところでも見られるように，最下段にはかなり大きな石を使用しているものと思われる。

この石室の横断面をみると，玄室・羨道いずれも左右からの持ち送りの構築方法をとっている。玄室中央部で床面巾2.5mに対し，天井部巾1.2mと半分以下にも狭くなっている。

天井は，玄室3枚，玄門部1枚，羨道部2枚の天井石で構成している。玄室の天井は，中央2枚だけ一段高く，奥壁に乗せた天井石と，玄門部の天井石とから前後に持ち送った方法をとっている。したがって，奥壁近くの高さは2mであるのに対し，中央部では2.4mもあり，そして玄門部で一段低く，羨道部の天井がこれに並んでいる。

石室の計測値と平面プランをみると，玄室の長さと巾の比は約3：2の長方形である。左右とも約20cmずつの袖をもっている。羨道部に土砂の二次堆積が多いため，はたして玄門石を境にして再び巾が広くなるのか，狭くなっているのかは不明である。羨道の長さは，玄室の長さとほとんど同じである。

3．観音山古墳

所　在　地　　那賀郡羽ノ浦町中庄字千田池33

所　有　者　　挙正寺（現住職　庄野　真澄）

調査期間　　昭和47年8月19日～23日

調査協力　　井上りえ子・岡本　坦・岡山真知子・宮崎　和電

遺跡の位置

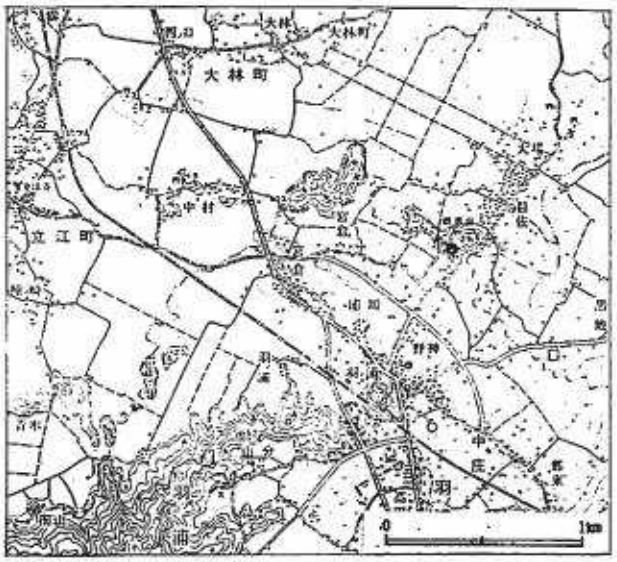
羽ノ浦町の北部，宮倉周辺の沖積平野には点々と島状の小高い独立丘陵がみられる。その東端にあるのが観音山で，海岸線とは直線距離にして2.5kmの隔たりがあるにすぎない。

この観音山（標高29m）の南麓は挙正寺境内となっており，観音山古墳は観音堂のすぐ裏側にある。観音堂から格子ごしに石室内がうかがえる。薄暗い内部には，観音像が安置され，土地の人々はここを穴音観と呼び，信仰の対象にしている。

この石室が発見されたのはいつのことかわからないし，遺物も伝わっていない。また，この観音山

の西にある能路寺山や寺田山にもそれぞれ能路寺古墳群，寺田山古墳群があり，古くから知られている註(1)。現時点では正確な数や内容はつかめていないが，後期の古墳群と理解してよいだろう。

註 (1)『趣味の郷土　羽ノ浦町』羽ノ浦町 1959年



第9図　観音山古墳の位置（2万5千分の1，『阿波富岡』）

墳丘とその現状

この古墳は，観音堂の陰にかくれるように残されているので，すぐには古墳の存在に気がつかない。寺院境内ということもあって，墳丘のまわりは削り取られ，ほとんど原形を失なっている。南側は墳丘と接して観音堂が建てられ，わずかなすき間しか見あたらない。東側にまわると，整地のため墳丘は削られ，裾がわからない。まだ保存状態の良いと思われる西側も整地の跡がうかがえる。

墳丘が北側の斜面と接する状態から見ると，ゆるやかに南に張り出した斜面を利用して築かれたようである。墳丘は南北に細長く残されているが，北側の様子から円墳のようである。推定して，墳丘の直径約12m・高さは3.5m前後と考えられる。墳頂部と寺院境内の比高は約4.5m，平野部との比高は10mあまりであろう。

石室の規模と構造

この石室は，両袖式の横穴式石室である。すべて砂岩質の自然石を用いているが，若干調整したものもみられる。質のもろい砂岩は，長年の雨水の浸透によって浸食され，荒れた岩肌をみせ，あちこちにくずれが目立っている。現在の壁面は凹凸がはげしく，整然とした石室を感じさせない。

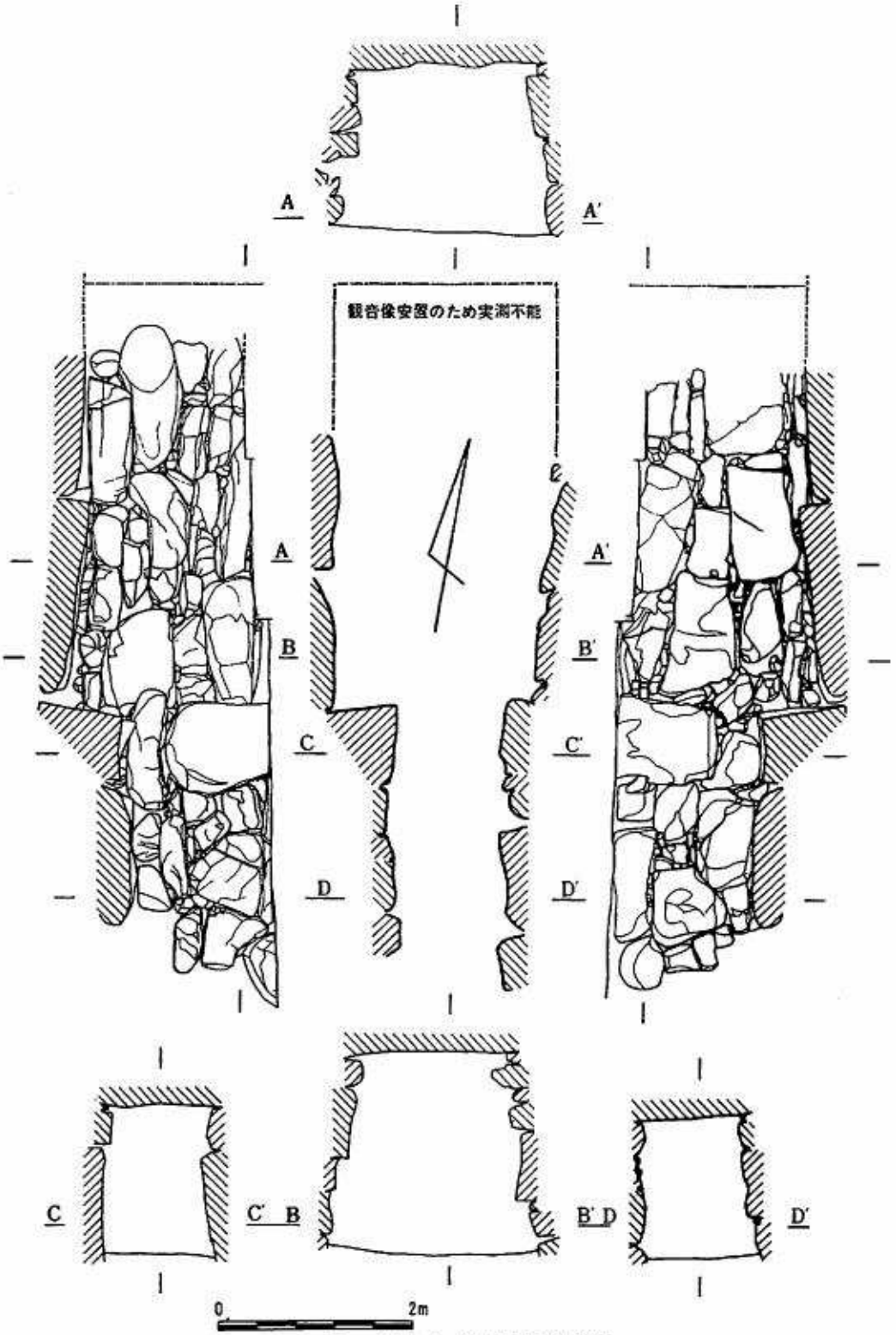
奥壁正面には観音像（石像）が安置されており，わずかなすき間を利用してでないと，奥壁はもちろん，奥壁から左側壁で1m，右側壁で60cmの部分はみることすらできないという状態であり，実測できなかった。なお，奥壁は5個程度のかなり大きな石を使って築いている。

左右側壁は，基本的には1.2m～1.5m程度のかなり大きな石を横位に積み上げ築いている。左右から持送っているが，あまり急ではない。いわゆる玄門部は，左右とも二段積みで天井に接する。とくに下段の石は大きくしかも縦長に用いている。この部分は張り出すことなく，羨道部と同じ直線上にある。しかし，この石の配置によって左右の袖の巾に違いをつくっている。左袖で20cm，右袖で60cmとなり，平面プランをみると，羨道が左側壁に片寄った格好になっている。

羨道部入口はかなり取り壊されたらしく，玄室の長さに比してか

全長		7.35m
玄室	長	4.30
	巾	2.10
	高	2.00
羨道	長	3.05
	巾	1.10
	高	1.50

第3表　石室計側値



第 10 図　観音山古墳石室実測図

なり短い。現存する羨道の長さは，袖の部分より計って左側壁がちょうど3mである。右側壁がさらにそれより50cm短い。入口付近の石積みの状態をよく観察すると，かなり積み替えている。図面の側壁は，原状のままと思われる石積みを描き，他ははぶいた。

羨道側壁は，玄室に比べて，やや小さい石を使って築いている。そして，玄室とは異なり，側壁はほぼ垂直で，持送りはほとんど見られない。

つぎに，床面は玄室・羨道部ともきれいに整理されており，礫などは見当らない。側壁の石積みの状態からみると，現在の床面よりやや深い感じがする。

天井の状態は，玄室に巨石をあまり高低差なく二枚かけ，羨道部になって一段低く，二枚の天井石をかけている。玄室と羨道部との差は約50cmである。

最後に玄室と羨道部との比をさぐってみたい。玄室の長さと巾の比は2：1である。また，玄室と羨道部の巾の比も2：1である。ところで，玄室にみられた長さと巾の比の2：1は，先に報告した穴不動古墳の例と同じであり，しかも玄室に限っていえば，その規模はほとんど同じ数値を示している点に興味をおぼえる。

4．弁慶の岩窟

所　在　地　小松島市芝生町大嶽8／2

所　有　者　鶴本　清

県指定年月日　昭和28年7月21日

調査期間　昭和48年2月10日・11日

調査協力　岡山真知子・小林　勝美・松崎　みさ・宮崎　和重

小松島市文化財保護委員会

城東高等学校郷土研究部

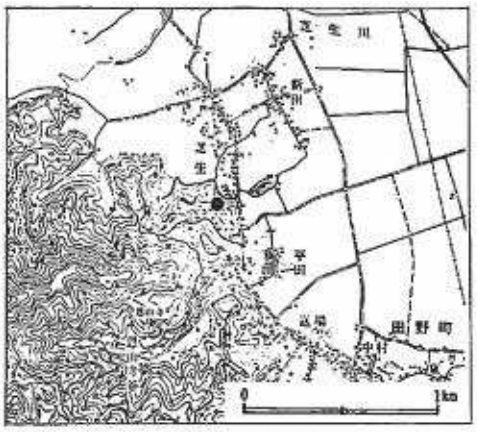
（阿部　洋一・川田　友子・角地　博・滝山　雄一・武知　千秋・不藤三知子）

遺跡の位置

小松島市南部を東西に流れる芝生川は，田浦町に端を発して芝生町を経て，金磯町の小松島湾にそそぐ小河川である。

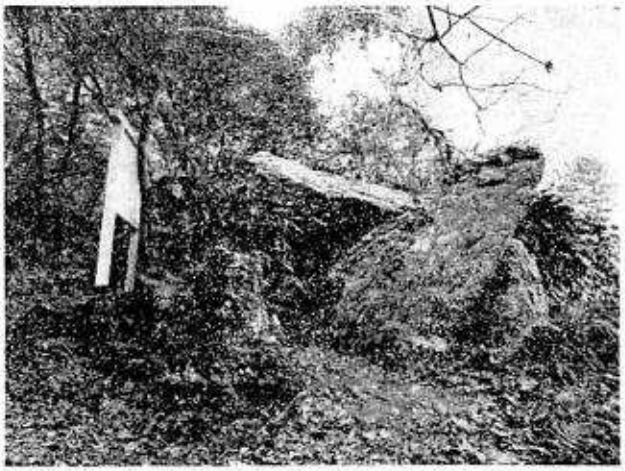
この芝生川に沿って南側には標高157mの低い山塊が横たわっている。この北麓には小松島市内では有数の二つの古墳群が東西に位置している。その一つは，芝生川の源，前山一帯にある前山古墳群（4世紀後半～6世紀末）である。

この古墳群から東へ2km，山塊の東端にもう一つの芝生古墳群（6世紀～7世紀前半）がある。「弁慶の



第11図　弁慶の岩窟の位置（2万5千分の1，「立江」）

岩窟」は芝生古墳群の代表的な古墳である。芝生古墳群は前者に比べて数ははるかに少なく，ごく短期間に形成されたようである。すでにいくつか破壊されているため，実態はつかめないが，横穴式石室と組合式石棺が知られている。



第12図　石室正面の現状

墳丘とその現状

前述した山塊の東端には，海抜37.2mの三角点が位置している。この尾根づたいに西へ少し行くと，北斜面が袋状の地形となるあたり，稜線から高さにして4mほど下りた地点に巨大な岩が露出している。地元の人びとは，ここを弁慶の岩窟と呼んでいる。

封土は流れ，墳丘は跡かたもなく，石室は丸裸で雑木林のなかにその残骸をさらけ出している。なぜ，このような状態になったのかまったくわからない。石室のすぐ北側は，開墾され，畑となって今も耕されているが，この畑も次第と墓地となって変わっていくようだ。

この古墳については，はやくから文献でも紹介されている[1]が，墳丘の形状について参考となるものはない。まったく手のつけようがないというほど荒れはてた状態なのである。

石室の規模と構造

石室の保存状態もまったく悪い。石室は露出し，今にも崩れ出しそうな有様である。

石室は斜面に沿って東に開口する横穴式石室である。羨道部はすでにほとんどなく，一枚の大きな天井石が落ち，玄室への道を塞いでいる。露出している石室は玄室部分のみと考えられる。

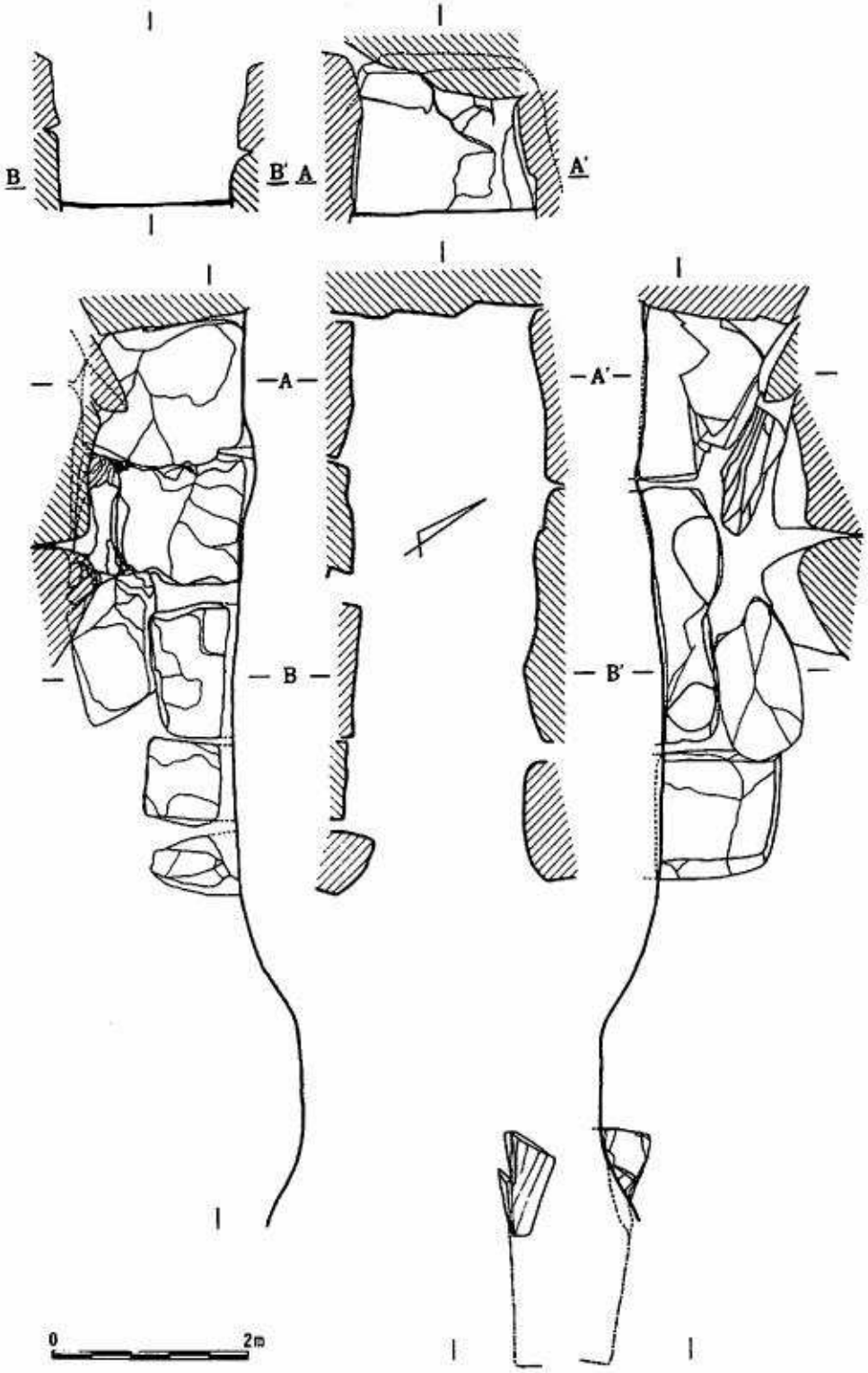
石室内部はかなりの土砂が堆積しており，不安定な床面を呈している。したがって，羨道部の最下段ぐらいの側壁はところどころ残っている可能性がある。

奥壁は一枚石を使用しており，やや前に傾いている。天井部を見ると，奥壁の上にかけた天井石は同じように前に崩れかかっている。

左側壁の中央は，側壁が欠け，ぽっかりと大きな穴があいている。その部分に集中して側壁も天井石もすべり込むような状態で止っている。使用している石は1.5m前後のかなり大きな石である。とくに中央最下段の石は2.5mもある。

右側壁の保存状態はまだ良い。同じように1.5m前後の巨石を主として使い，平坦面を壁面として利用している。しかし，平坦面を利用しているわりには壁面の凹凸が多い。とくに加工した痕跡は見られない。右側壁の端が平面プランで30cmほど袖状に張り出している。この部分が袖にあたるかどうかは疑問である。この石を現位置から見ると，壁面にあたる部分が平坦ではなく，先端が尖った状態である。上段に使用していた石が落ちて，現位置にあると見ることもできる。

一応，左側壁で玄室を計ると，長さは5.7mとなる。巾は最大で2.0mである。この数値からみる



第13図　弁慶の岩窟石室実測図

全長		10.65m
玄室	長 巾 高	5.80 1.80 1.75
羨道	長 巾 高	4.85 — —

第4表　石室計測値

と，かなり細長い長方形プランとなる。高さは右側壁で計ると，1.8mである。規模からすると，高さはもっとあってよい。

ところで，左側壁の端から2.5m離れて，長さ1mの石が一個，高さ50cmあまり露出している。ボーリング棒で調べてみると，この石はさらに東側へつづき，2.4mの大きさの石であることがわかった。この石はおそらく羨道部の側壁で，原状のまま保存されていると思われる。また，この石は左側壁面の延長線上に位置している。この石の端から，左側壁端までの距離は4.85m，奥壁までの距離は10.65mである。

この石が原状のままで，しかも羨道部末端の石と仮定すれば，最低限全長10.65mの長大な石室と考えられる。

註(1)　鳥居龍蔵「阿波勝浦郡芝生村岩屋の話」東京人類学会雑誌33号　1888年

5．段ノ塚穴（西墳　通称棚塚）

所在地　美馬郡美馬町坊僧368

管理者　美馬町教育委員会

国指定年月日　昭和17年10月14日

調査期間　昭和48年3月14日～25日

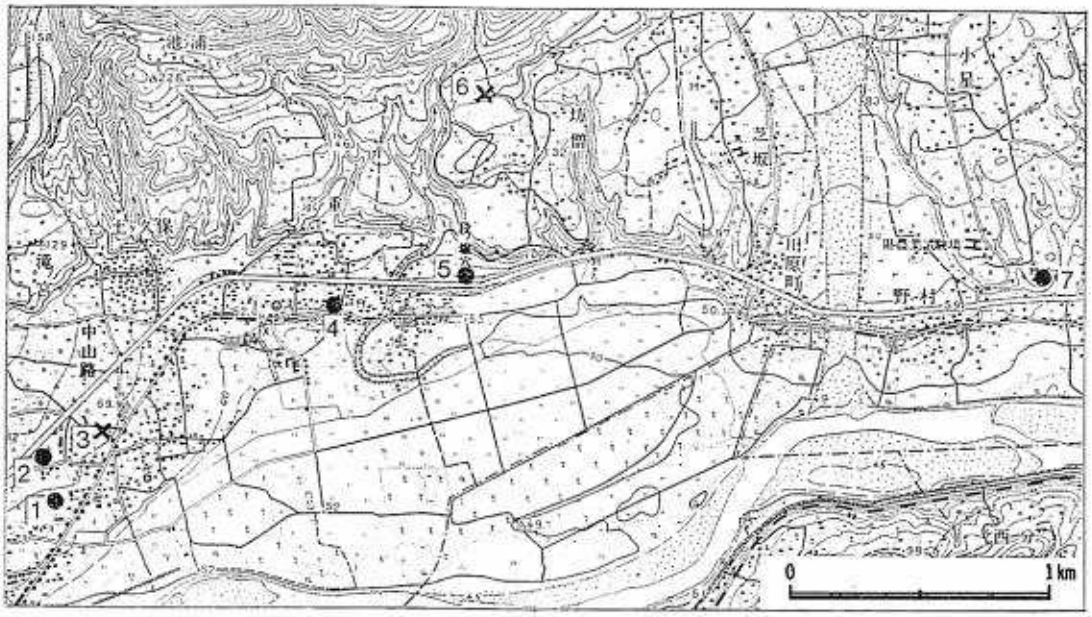
調査協力　池内　千秋・岡本　坦・岡山真知子・小林　勝美・篠原　広志・松崎　みさ
三井　淳子・宮崎　和重
美馬町教育委員会・美馬町文化財保護委員会
城東高等学校郷土研究部
（阿部　洋一・井内やよい・大石　良隆・川田　友子・角地　博・滝山　雄一
武知　千秋・不藤三知子）

遺跡の位置

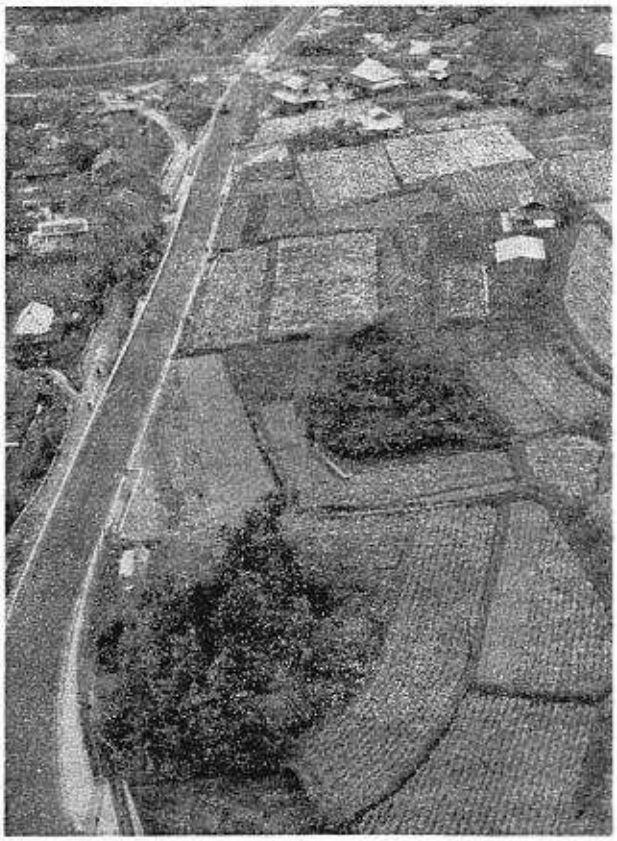
段ノ塚穴は，古くから文献にも紹介された註(1) 古墳で，東墳の太鼓塚と西墳の棚塚とを総称した呼称である。地元民には，家具貸伝説で身近に親しまれた古墳である。考古学的には特色ある巨大な横穴式石室を有することで注目されてきた。

吉野川上流域は，とくに河岸段丘の発達したところである。ここ美馬町一帯においても顕著であり，現在の集落も河岸段丘上に発達している。段ノ塚穴はこの河岸段丘上にあって，段ノ塚穴という名称は立地そのものを形容している。

この周辺地域（旧郡里村）は，6世紀から7・8世紀にかけて，吉野川上流域の重要な地域として指摘されている。先に発掘調査された立光廃寺址（8世紀初頭）註(2) は段ノ塚穴から西へ1kmの地点にあり，また，立光廃寺の北方は郡衙推定地となっている。とりわけ，段ノ塚穴だけに限ってみても，古墳時代後期を語るには欠かせない。



第14図　段ノ塚穴と周辺の主な遺跡（2万5千分の1，『貞光』）　1．願勝寺1号古墳　2．井川古墳　3．立光院寺　4．真鍋塚　5．段ノ塚穴　6．坊間池瓦窯　7．野村八幡古墳



第15図　空からみた段ノ塚穴　　朝日新聞社提供

墳丘とその現状

段ノ塚穴は，北から南へゆるやかに傾斜する段丘の中ほどから先端部にかけて立地している。二つの古墳の並ぶ様子は，吉野川の南岸からでもはっきりと見わたすことができる。古墳のまわりには民家もなく，一面よく耕された畑地である。数年前，太鼓塚の直前に県道が新設され，前面の地形が不明瞭になったことは何よりも残念である。

両古墳とも墳丘の保存状態は比較的よいが，裾周辺はかなり削り取られている。とくに棚塚の南側は墓地となり，削り込まれている。

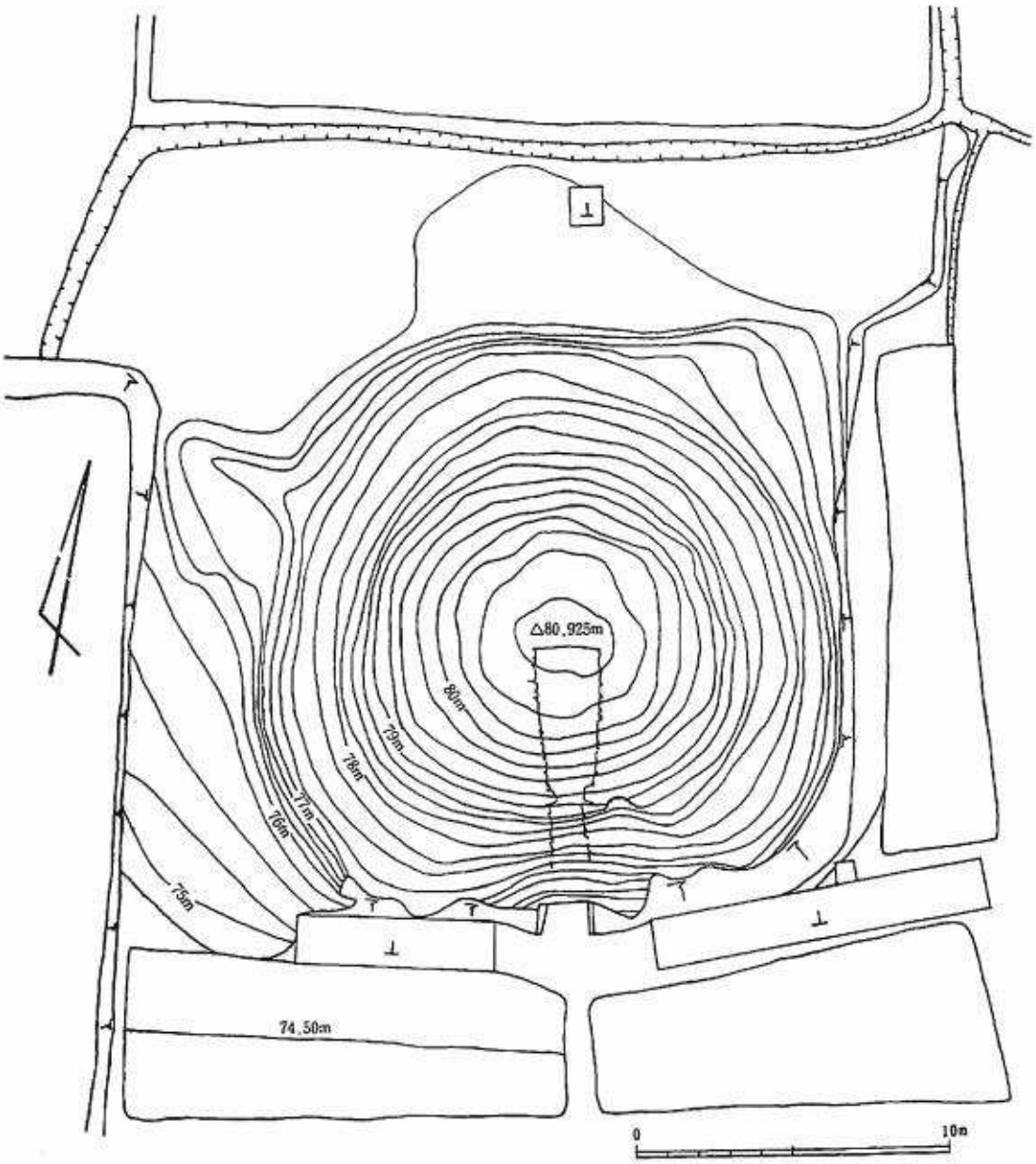
棚塚は太鼓塚の北西側に位置し，両者の距離は，墳丘の裾で計ると28mである。棚塚の石室入口の畑には74.50mの等高線が，太鼓塚の前面には72mの等高線が走る。現地形でも2.5mの高低差が

ある。しかし，棚塚の墳頂部は80.925mであるのに対し，太鼓塚の墳頂部は81.533mもある。

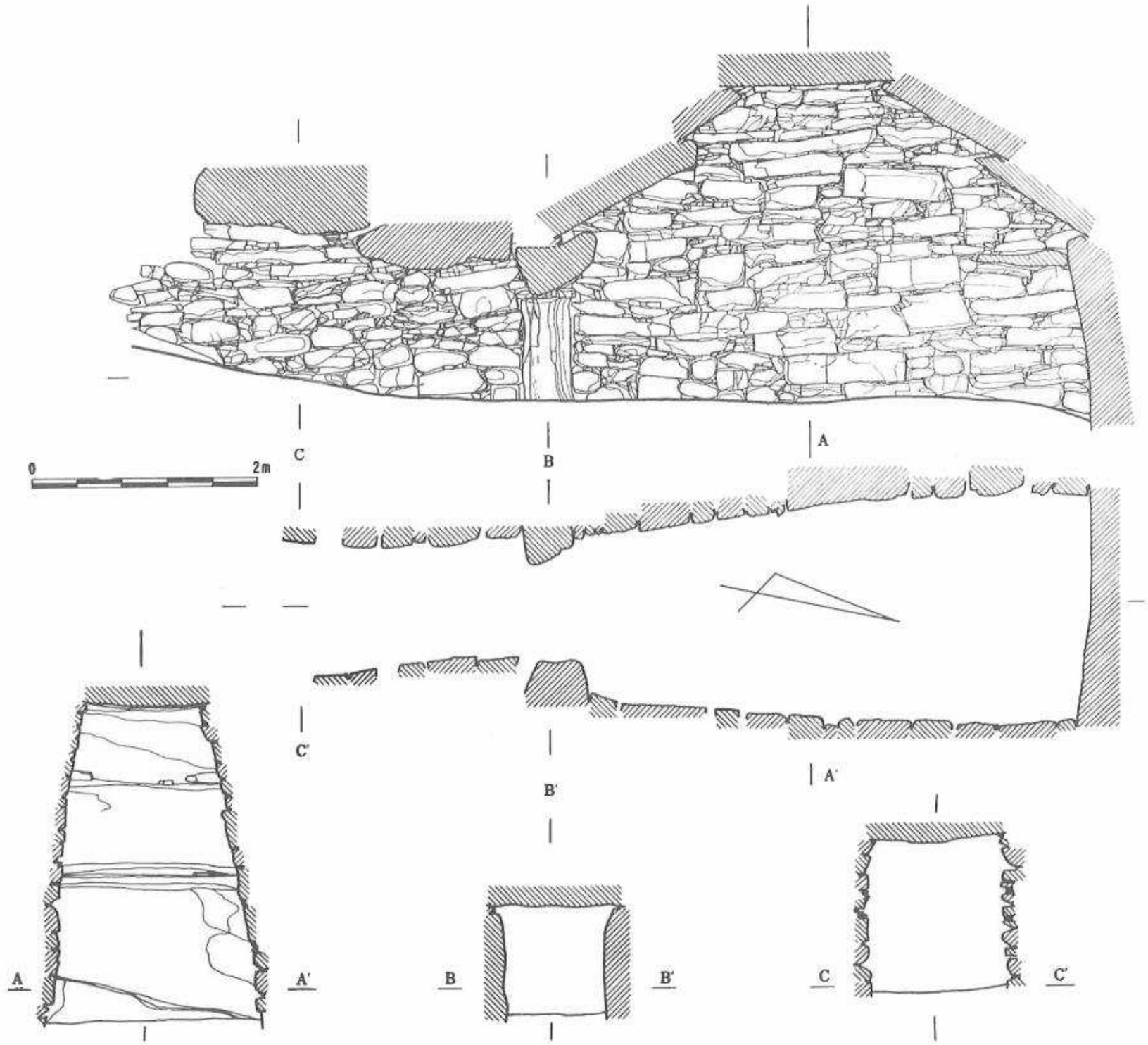
棚塚・太鼓塚とも円墳と推定され，封土は完全な盛り土のようである。葺石，埴輪等の外部施設については明らかでない。

棚塚の直径は約20m，太鼓塚は東西で35m，南北で30mとなる。太鼓塚の墳丘は墳頂部から東斜面にかけて，かなり崩れがひどい。

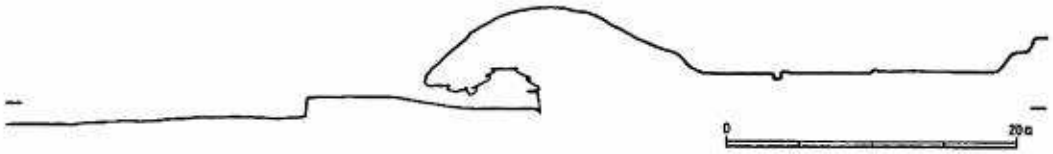
棚塚の高さを四周の畑と比較してみると，南で6.4m，東で6.0m，北で4.6m，西で6.8mとなる。



第16図　棚塚の墳丘



第 17 図　棚 塚 石 室 実 測 図



第18図　棚塚墳丘断面図

玄室床面と墳頂との高低差は7.2mある。西側の畑との差がこの数値にもっとも近い。太鼓塚については未調査なので，四周との比較は十分でないが，玄室床面と墳頂との高低差は，10.4mである。

棚塚の墳丘と石室の関係は第18図に示す通りである。玄室最高部は墳丘中央まで達しておらず，南斜面下に位置している。

石室の規模と構造

この石室の特徴は，一口にいって，いわゆる穹窿式の天井構造と石棚を備えている点である。

ここにいう穹窿式の天井とは，奥壁側と玄門部側からそれぞれ天井石を中央方向に持ち送り，ほぼ玄室中央が最高部となる構造のことである。棚塚の場合，縦断面で見ると，奥壁に一枚の巨石を立て，その上部に天井石を斜めにかけ，さらに一枚の天井石を持ち送り，これとは対称的に玄門部方向から同じように天井石を持ち送り，両方向から持ち送ってきた天井石に最後の一枚をわたしかけている。最高部で高さは，2.8mある。この構造によると，面的にはあまり広くない玄室でも，天井部を高くすることによって，より広い空間が得られる。

この天井構造の場合，左右側壁はもちろん奥壁と玄門石にも強い力がかかることになり，これらが重要となってくる。側壁は左右から持ち送り，天井面の巾をぐっと狭くしている。中央で床面の巾が1.9mであるのに対し，天井面の巾は約半分の1.0mである。玄門部を見ると，左右の玄門石が支柱となり，その上に他より一段低い天井をかけ，この天井石を支えにして，さらに天井石を持ち送っている。天井の持ち送りは，玄室と同じではないが，羨道部でもみられ，入口方向が高くなっている。

奥壁は高さ1.6mで，やや内傾し，左側が前方に出ている。中央横断面から奥壁を見通してみると，二枚の持ち送った天井石までが奥壁かのような印象を与えているが，縦断面でみると，天井石であることは明らかである。

棚は奥壁に平行して，床面から約1.2mの高さで水平につけられている。棚の両端は側壁に組み込まれており，側壁を積み上げていく段階ですでにつくられていたことを示している。石棚は緑泥片岩の平らな一枚石で，もっとも厚い部分で15cm，奥行は80cmである。奥壁と天井石の接点に近いところにあるが，物を置くだけの余裕は十分ある。

つぎに平面プランをみてみよう。細長い末広がりの形態である。その広がりも中央までで，中央から奥壁にかけてほぼ平行である。床面の巾は，玄門石の間が0.85m，玄室入口で1.35m，中央で1.9m，奥壁で1.95mである。玄門部は左右対称でない。右側壁は玄室・羨道部とも同じ線上に築かれ，立石が突出することによって両方の区切りがつけられている。それに対して，左側壁は羨道部側壁と同じ面とし，逆に立石によって袖をつくっている。したがって，平面プランが左片袖かのような状態

を呈している。

段ノ塚穴		棚塚	太鼓塚
全長		8.65 m	13.10 m
玄室	長	4.50	4.60
	巾（最大）	1.95	3.40
	高（最高）	2.80	4.20
玄門	長	0.45	0.80
	巾	0.85	1.20
	高	0.92	1.75
羨道	長	3.70	7.70
	巾（中央）	1.20	2.35
	高（中央）	—	2.10

第5表　石室計測値

この石室に使われている用材は，緑泥片岩などの片岩系の石である。奥壁・天井石は，自然石をそのまま使用し，平坦面をうまく利用している。側壁は扁平な割石を平積みにしており，まれに小口積みがみられる。また，砂岩の自然石もところどころ用いている。玄室で上・下の積み方はとくに変わっていないが，やや下の方が厚手の割石を使用していること，砂岩の使用が上方よりも多いことぐらいである。玄室と羨道部を比べてみると，羨道部の方が石が小さく，また砂岩の使用が多い。

すでに玄室側壁の持ち送りについては述べておいたが，玄門部立石についていえば，ほとんど垂直である。また，羨道部もほとんど持ち送りがみられない。

なお，床面は入口近くにかなりの土砂の堆積がみられ，床面の状態は不明であるが，玄室では，敷石とみられる砂岩の自然石が露出している。この敷石はかなり厚く堆積していると考えられる。

註(1)　段ノ塚穴の名称が使われた最初の文献として，つぎのものがあげられる。
笠井新也「段ノ塚穴」『阿波名勝』1　1922年

註(2)　『立光寺跡の発掘調査』徳島県文化財調査報告書第11集　1968年
『阿波・立光寺跡調査概報』徳島県文化財調査報告書第12集　1969年

2．横穴式石室に関する二，三の問題

1．横穴式石室の採用

先に報告した5基の横穴式石室は，県下でも古くから知られている代表的な横穴式石室の例である。残念なことは，ほとんど出土品が今日まで伝わっておらず，各石室の年代を決定する材料を欠いていることである。

5例に共通する特徴は，巨大な石材を用いた県下で最大級の横穴式石室をもつことである。これらの構造上，構築上の特徴は，古墳時代後期後半ないし終末期のものであり，したがって，この時期に該当するものとみてあまり誤まりはないであろう。

ところで，わが国における横穴式石室の採用は，5世紀中葉といわれ，この新しい埋葬方法は，古墳時代を前期・後期に二分する重要な歴史的事象でもある。徳島県内の古墳時代を考えるうえにおいても，横穴式石室の採用は同じような意味をもっている。

県下の横穴式石室は，現在までに分布調査や文献によって確認されたものは巻末の一覧表に示すとおりである。文献によって確認したものの中には，脱落や誤認が若干あるかもしれないし，また，破壊されて現存しないものもかなり見受けられる。

横穴式石室の分布は，ほぼ県下全域（山間部を除く）にわたっているが，吉野川流域において顕著である。とくに群集する地域は，鳴門市大麻町から板野郡板野町にかけての一帯および徳島市国府町から名西郡石井町にかけての一帯をあげることができる。これらは，吉野川下流域に開ける広大な沖積平野，すなわち豊かな農業生産を背景とした経済的基盤が想定される地域にあたっている。

県下の横穴式石室の変遷を見ると，基本的には畿内と同じ様相で展開しているといえる。そのことは，地理的にみて畿内とは至近距離にあり，絶えず畿内の影響を敏感に受け容れたのであろうと考えられる。

横穴式石室の採用の時期をさぐってみると，畿内より一段階ないし二段階程度新しい時期に出現する。それは畿内における初期の横穴式石室の形態をもつものが見られないこと，また，副葬品として森浩一氏の編年注(1)によるⅡ型式以前の須恵器が出土していないことなどによって裏付けされる。

徳島県での横穴式石室出現の時期を考えるうえで，尼寺古墳群（名西郡石井町尼寺）注(2)が重要な鍵を握っているといえる。尼寺1号墳は，箱式石棺を埋葬施設とする円墳である。石棺の大きさは，内法で長さ1.94m，巾東端0.52m，西端0.41m，深さ0.25mで，丘陵の最先端部の頂上部に東西に位置している。

この1号墳から10m隔てた北斜面には，横穴式石室を埋葬施設とする尼寺2号墳がある。尼寺2号墳の石室は，全長5.82mの西に開口する片袖式（玄室から見て左側に袖をもつ）である。玄室の長さ2.62m，巾1.8m，高さ約1.3mで，やや正方形に近いプランである。天井の構造は，天井石がすべて取り除かれているため明らかでないが，側壁の残り具合からみて水平にかけ，羨道部で一段低くかけられていたものと思われる。側壁の持ち送りはなく，垂直に築いている。

1号墳の遺物は，棺内から管玉（4），ガラス小玉（17），棺外から有蓋短頸壺（1），その他窯

掘時の出土品として直刀破片（4），蓋坏（1）がある。2号墳の遺物は，わずかに高坏の破片が3片である。

ここで留意しておきたいのは，1号墳出土の有蓋短頸壺，蓋坏がいずれも第Ⅱ型式の特徴を有する須恵器であり，2号墳出土の須恵器が一型式新しい第Ⅲ型式のものという点である。

第Ⅱ型式の須恵器を伴う箱式石棺は，鳴門市日出古墳群註(3)においてもみられる。日出古墳群は，日出製塩遺跡（第Ⅰ型式後半から第Ⅱ型式の須恵器が大量に出土）に関連する古墳群で，箱式石棺2基，横穴式石室1基，内部施設不明2基の計5基からなっている。このうちD号墳だけ遺物が明らかであり，坏の蓋（1），身（2）が出土している。この須恵器は，いずれも第Ⅱ型式である。この古墳群ただ1基の横穴式石室であるE号墳の構造や規模は明確でない。しかし，日出遺跡の存続年代は第Ⅱ型式までであり，この古墳と日出遺跡の関連から考えて，ほぼ同時期の可能性もでてくる。

日出遺跡出土の多量の須恵器は，森浩一氏によると，大阪府南部からもたらされたものであろうという。県下で，このように古式の須恵器が多量にもたらされた例はほかになく，このことから考えて日出古墳群での横穴式石室の採用が県下で最も早い可能性もある。県内の須恵器生産は，阿南市西池田窯址や徳島市内ノ御田窯址などで知られるように，第Ⅲ型式からである。尼寺1号墳出土の須恵器も明らかに，県外からもたらされたものであろう。

尼寺1号墳や日出D号墳は，第Ⅱ型式の須恵器を伴う数少ない例である。この2基の古墳は，箱式石棺を埋葬施設とする点で共通している。今のところ，第Ⅱ型式に遡る横穴式石室はなく，ほぼ第Ⅲ型式の時期になって波及したものと考えられる。しかし，日出E号墳のように第Ⅱ型式に遡る可能性をもつものもあり，今後の調査研究に待つところが大きい。

本県の横穴式石室の採用から変遷までを考えると，ある程度，定型化された時点での横穴式石室が畿内から伝播したものと思われる。すでに述べたように，その変遷も基本的には畿内の様相と似ている。しかし，県下の横穴式石室をみるとき，考えねばならない問題として，地域性の問題がある。一様に同時期に同形態の横穴式石室の変遷が見られるのではなく，各集団ごとの相違が見られるのである。とりわけ，後述する「段ノ塚穴型」の石室は，県下の横穴式石室を考えるうえで，きわめて重要な課題である。

註 (1) 森　浩一「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁器全集』1　1958年
註 (2) 石井町文化財保護委員会編『石井町文化財調査報告書』第4集　1969年
註 (3) 森　浩一・白石太一郎「鳴門海峡における古代漁業遺跡調査報告」『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部調査報告　第2冊　1968年

2．段ノ塚穴型石室についての一考察

美馬郡周辺にしか見られない，特徴ある石室を段ノ塚穴に代表されるので，仮りに「段ノ塚穴型石室」と呼ぶことにする。前述もしたように，穹隆式の天井をもち，平面プランが長方形ではなく，胴張りまたは末広がりとなり，しかも壁を左右から，天井を前後に持ち送った横穴式石室のことである。

現在まで確認できた石室が24で，その分布は第19図に示す通りである。現行政区画でいえば，美馬

郡と阿波郡阿波町西部の吉野川沿いの地帯に限られる。

1基の前方後円墳（三島西古墳）を除けば，15～35mの円墳である。その立地としては，尾根の中腹でしかも突端部に築造される例が多い。なかには，段丘の中央部や突端部に築造されるものもみられる。開口方向は，北岸のものがほとんど南方向であるのに対し，南岸では，北と南が半々である。

これらの古墳は地域的にみて，次の4つのグループに分けることができる。

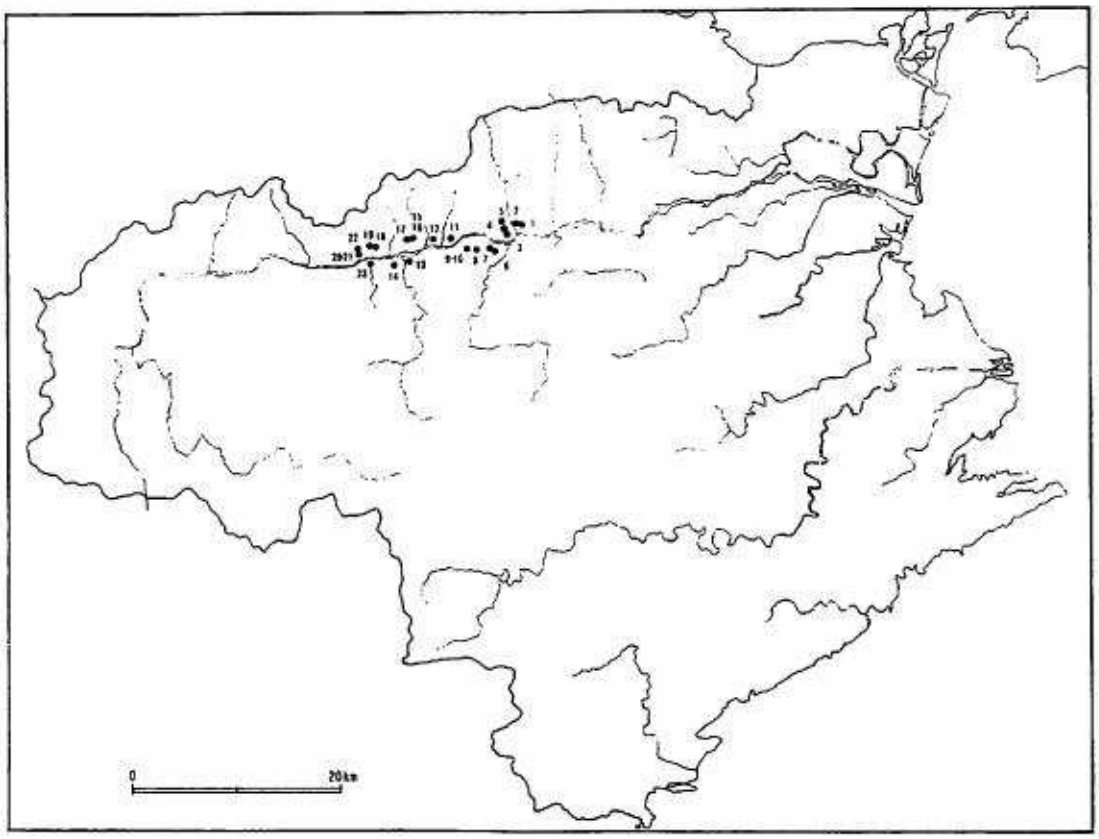
Ⅰグループ（1～5），Ⅱグループ（6～10），Ⅲグループ（11～17），Ⅳグループ（18～23）

それぞれのグループでも，かなりの細分が可能であるが，グループ内でかなりの共通点（石材とか石棚など）を見い出すことができ，後述もするが，地域的特徴とも把えることができる。

一つの試みとして，玄門部の構造上の違いによる型式分類を行なった。第1類型は，玄門部をとくに構成しないもの，第2類型は，玄室入口手前で仕切り程度の立石をもち，立石から玄室までの側壁を若干張り出して玄門部を構成するもの，第3類型は，太く巾広い立石のみによって玄門部とするものである。

また，玄室のプラン（胴張りの程度）による分類も併行した。A型はb＞c＝a，C型はa＝b＞c，B型はA型・C型の中間である（aは奥壁巾，bは最大巾，cは入口側巾）。

大筋としては，1→2→3であろうと思われるが，第2類型でB型のもの（三谷古墳，三島東古墳，



第19図　段ノ塚穴型石室分布図　図中の番号は第6表の遺跡番号と同じ

大国魂古墳）と，同じ第３類型Ｃ型でも棚塚と北原古墳は別に考えなければならない。第２類Ｂ型のものは，玄室の長さより最大巾が大きくなる形で，かなり古い型式と考えてよいのではないだろうか。また，棚塚と北原古墳は立石をもって玄門部としているが，立石以外の壁で袖をつくらない。しかも極端に細長いものである。

このように例外もあるが，Ｉグループにおいてはほぼ石室の編年と考えてよいだろう。各地域で他の埋葬方法と異なった首長墓的存在としてのこのタイプの石室が，最後に太鼓塚（第３類型Ｂ型）を築造する技術にまで高められていったのではないだろうか。

次にこれらの古墳から，構造上，構築上の特徴をいくつか取り上げていきたい。

玄室の天井の構築方法は，奥壁側と玄門側から前後に持ち送り，最後に一枚の天井石をかける。最終にかける天井石の位置は，ほぼ玄室の中央にあたるとみられるが，中心点の前後の移動は類型別や天井枚数によって異なる。枚数は２枚ないし３枚ずつ，前後均等な配分が多いが，なかには逆ったものもある。一つの傾向として，第３類型では，奥壁側の枚数が多い。もっとも枚数の少ない例は，江ノ脇古墳で合計３枚の天井石しか使用していない。

縦断面をみると，天井を持ち送りはじめる位置は，奥壁側，玄門側ほぼ同じ高さからである。このレベルで側壁の積み方が，上下で異なるものがみられる。

側壁は，片岩の割石を用いる場合が多く，24例中15例で，この場合，平積みを基本としてときには小口積みを併用することもある。砂岩の栗石を積むものは，24例中５例と少ない。この場合，自然石のまま加工することなく乱石積みにしている。片岩と砂岩を混用するものは４例あり，八幡２号墳・大国魂古墳は，下半に砂岩を上半に片岩を積んでいる。中拝原古墳はこの逆の積み方をしており，基盤に片岩の割石を積む。

奥壁はどうであろうか。一枚のいわゆる鏡石で奥壁を構成するものは，24例中９例あり，第３類型に多い。この鏡石は片岩に限られ，砂岩はない。一枚石に準ずるものとして，一枚石を置き，その上に４段の積み石をしたもの（中拝原古墳），３枚の片岩を横に並列し，その上に片岩の割石積みをしたもの（八幡１号墳）がある。側壁に比べ，奥壁に砂岩のみを用いる例は３例と少ない。片岩と砂岩を混用する例も少なくなる。全般に奥壁は，整然とした築き方をしており，石材の選定も配慮されている。

石室の石材の用い方は，石材の産出と古墳の立地とが関連する。中央構造線をはさんで，吉野川南岸は長瀞帯（結晶片岩層），北岸は和泉層群と色分けされる。片岩のみで構築した石室は，南岸および北岸に，砂岩と片岩を混用した例は北岸に分布する。北岸に分布する古墳にはできるだけ片岩を使用しようという意識がうかがえる。

類型別に石材の使用をみると，混用例は第１類型で３例中すべて，第２類型で７例中２例，第３類型で皆無の状態である。この傾向は，第３類型がもっとも完成されたタイプであるという一つの裏付けともなる。

つぎに床面をみると，敷石とみられるものは24例中12例と半数に及んでいる。敷石は，こぶし大の砂岩で，太鼓塚・棚塚などはかなり厚く敷いていると思われる。今後，不明なもののなかから，敷石

をもつ石室の数は増えそうである。

玄門部床面に仕切り石をもつ例がある。北岡西古墳，野村八幡古墳，三島西古墳，江ノ脇古墳の4例である。いずれも第3類型である。今のところ，岩橋千塚（和歌山市）でみられる玄門部床面の基石は確認されていない。

つぎに石棚にふれたい。県内の石室で石棚の発見される例は，この段ノ塚穴型石室に限られる。6例あり，野村八幡古墳，棚塚，荒川古墳，海原古墳，八幡1号古墳，大国魂古墳で，Ⅲグループ・Ⅳグループに属している。石棚はすべて片岩の一枚石で，奥壁と平行して左右の側壁に組み込まれており，奥壁には組み込まれない。その位置は高く，奥壁最高部である。石棚は，石室を構築する時点で設けられ，構築後備え付けたものではない。

石棚の左右の巾は，石室の巾によってさまざまであるが，奥行は大国魂古墳の30cmを除くと，80cm前後と一定しており，そのうち3例は厚さ15cmと同じである。大国魂古墳の石棚は天井との空間がなく，奥行もないため，他の例と比べて一段と物を置くだけのスペースがない。この古墳が第2類型B型である点，段ノ塚穴型石室における石棚のあり方をさぐるカギでもある。野村八幡古墳の石棚は，平たい板状の棚ではなく，断面はやや丸く40cmと厚い。むしろ梁を感じさせるような石棚である。段ノ塚穴型石室では，岩橋千塚でみられる玄室空間の梁はみられない。わずかに太鼓塚で奥壁に組み込まれた石梁を見い出すにすぎない。この違いは，天井石の持送りに関連すると考えられる。

以上，段ノ塚穴型石室のいろいろな特徴を述べてきた。最後に残る課題は，この型式の出自と系譜である。いつ，どのような経路でこの地域に築かれるようになったのか，まだ明らかでない。これらの古墳から出土した遺物は，太鼓塚と真鍋塚・江ノ脇古墳・西山古墳がある程度で，その内容もごく限られている。太鼓塚出土の須恵器は，第Ⅲ形式後半から第Ⅳ形式前半のものである。真鍋塚では第Ⅳ形式前半の須恵器が出土している。第Ⅳ形式の須恵器は，太鼓塚では追葬時のものと考えられ，真鍋塚では築造時のものか追葬時のものか明らかでない。いずれにしても，第3類型が第Ⅳ形式前半まで存続していたことは明らかである。上限については，今のところまったく不明である。

ところで，この段ノ塚穴型石室は，よく岩橋千塚(1)と対比される。その共通点としては，天井を高くし立体的に構築すること，石棚をもつこと，壁の持送りが急であることなどがあげられる。このような共通点とは反対に，詳細に検討すると数多くの相違が見い出される。その第一は，天井部の持送りが岩橋千塚にはなく，玄室平面プランも岩橋千塚が方形であるのに対し，末広がりか胴張りである。また石材の用い方においても，岩橋千塚では扁平な小さな割石を小口積みとし，巨石を用いていないのに対し，割石は大きく平積みであって，鏡石などに巨石を用いている。そして，段ノ塚穴型石室では，玄門部に基石や扉石がまったくない。

このように基本的には類似する型式の石室といえるが，多くの違いが見られる。この両者の比較は今後検討しなければならない大きな課題であり，この理解によって，段ノ塚穴型石室の究明に一歩近づくものと思われる。

註(1) 末永雅雄編 『岩橋千塚』 関西大学文学部考古学研究紀要 第2冊 1967年

第6表　段ノ塚穴型

番号	名称	所在地	全長	玄室 長	玄室 幅(最大)	玄室 高(最高)	玄門部 長	玄門部 幅	玄門部 高	羨道部 長	羨道部 幅	羨道部 高
			m	m	m	m	m	m	m	m	m	m
1	県史跡 北岡東古墳	阿波郡阿波町字北岡115の2	4.70	3.00	2.10	2.24				1.70	0.80	—
2	県史跡 北岡西古墳	阿波郡阿波町字北岡74の2	5.83	3.87	2.08	3.12	0.30	1.10	1.65	1.66	1.34	1.70
3	東拝原古墳	美馬郡脇町江原拝原2473の2	5.72	3.86	2.50	2.70	0.90	0.80	—	0.96	0.90	—
4	中拝原古墳	美馬郡脇町江原拝原1081	6.40	3.60	2.33	2.97	0.60	0.75	—	2.20	1.20	—
5	北原古墳	美馬郡脇町江原拝原466	6.94	3.94	1.70	2.40	0.20	0.94	0.95	2.80	1.30	1.20
6	夜古墳	美馬郡穴吹町字夜55	—	3.82	2.40	1.86	—	0.47	—	—	—	—
7	尾山古墳	美馬郡穴吹町字尾山	—	3.82	2.32	—	—	1.15	—	—	—	—
8	三谷古墳	美馬郡穴吹町三谷	4.62	2.02	2.01	2.34	1.08	0.67	1.18	1.52	0.84	—
9	三島東古墳	美馬郡穴吹町三島	5.60	1.95	2.02	1.86	0.65	0.73	0.93	3.00	0.80	1.05
10	三島西古墳(1号)	美馬郡穴吹三島	5.25	2.30	2.01	1.90	0.25	0.82	1.13	2.70	1.10	1.40
	(2号)		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
11	園中古墳	美馬郡脇町岩倉園中2965の2	—	2.10	1.87	1.98	—	—	—	—	—	—
12	野村八幡古墳	美馬郡脇町岩倉宮の下4144	8.95	3.85	2.40	3.05	0.60	1.00	1.40	4.50	1.40	—
13	江ノ脇古墳	美馬郡貞光町江ノ脇	5.77	2.17	1.74	2.24	0.55	0.70	1.64	3.05	1.01	1.54
14	西山古墳	美馬郡貞光町西山	—	2.05	1.80	1.58	—	0.54	0.86	—	—	—
15	国史跡 段ノ塚穴太鼓塚	美馬郡美馬町坊僧373,374,365-2	13.10	4.60	3.40	4.20	0.80	1.20	1.75	7.70	2.55	2.10
16	国史跡 段ノ塚穴獅塚	美馬郡美馬町坊僧368	8.65	4.50	1.95	2.80	0.45	0.85	0.92	3.70	1.20	—
17	真萬塚	美馬郡美馬町宗重49	—	3.90	2.15	2.30	0.45	0.90	1.10	—	1.35	—
18	荒川古墳	美馬郡美馬町荒川	8.75	3.45	2.60	2.75	1.40	1.00	0.95	3.90	0.90	—
19	海原古墳	美馬郡美馬町西荒川86	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
20	八幡1号墳	美馬郡美馬町八幡	5.75	3.85	2.25	2.50				1.90	0.90	—
21	八幡2号墳	美馬郡美馬町八幡	4.95	3.00	2.20	2.45				1.95	0.75	—
22	大国魂古墳	美馬郡美馬町城	4.35	2.15	2.30	2.10	1.00	0.90	0.70	1.20	0.95	—
23	小野天神古墳	美馬郡半田町小野天神	4.00	—	2.35	2.16	—	—	—	—	—	—

石室一覧表

玄門部の構造	奥壁	石棚	玄室天井石の構成(奥壁側×最高部×玄門側)	玄室のプラン	側壁の石材	床面
第1類型	片岩割石と砂岩積み石	なし	2×1×3	C型	片岩の割石	敷石か?
第3類型	一枚石	なし	3×1×2	B型	砂岩の粟石	不明
第2類型	砂岩の積み石	なし	2×1×4	C型	砂岩の粟石	不明
第2類型	一枚石をおき，その上に4段の積み石	なし	3×1×3	C型	基盤に片岩割石あとは砂岩粟石	不明
第3類型	一枚石	なし	3×1×2	C型	砂岩の粟石	敷石か?
第2類型	片岩の割石積み	なし	1×2	C型	片岩の割石	敷石か?
不明	片岩の割石積み	なし	不明	不明	片岩の割石	不明
第2類型	一枚石	なし	2×1×2	B型	片岩の割石	不明
第2類型	片岩の割石積み	なし	3×1×2	B型	片岩の割石	敷石か?
第3類型	片岩の割石積み	なし	2×1×2	C型	片岩の割石	敷石か?
不明	片岩の割石積み	なし	2×1×2	不明	片岩の割石	不明
不明	砂岩の粟石積み	なし	3×1×1	C型	砂岩の粟石	不明
第3類型	一枚石	奥行80cm 厚さ40cm	2×1×2	A型	砂岩の粟石	敷石か?
第3類型	一枚石	なし	1×1×1	C型	片岩の割石	敷石か?
不明	片岩の割石積み	なし	2×1×2	C型	片岩の割石	不明
第3類型	片岩の割石積み	なし	3×1×3	B型	片岩の割石	敷石か?
第3類型	一枚石	奥行60cm 厚さ15cm	2×1×2	C型	片岩の割石	敷石か?
第3類型	一枚石	なし	3×1×2	C型	片岩の割石	不明
第2類型	一枚石	奥行78cm 厚さ15cm	3×1×4	C型	片岩の割石	敷石か?
不明	一枚石	奥行85cm 厚さ20cm	2×1×2	C型	砂岩の粟石主体 片岩も使用	不明
第1類型	3枚の片岩を横に並列 その上に片岩の割石積み	奥行80cm 厚さ15cm	3×1×3	C型	片岩の割石	敷石か?
第1類型	砂岩の積み石，その上に片岩の割石積み	なし	2×1×2	C型	下半…砂岩の粟石 上半…片岩も使用	不明
第2類型	砂岩の粟石積み	奥行30cm 厚さ8cm	2×1×2	B型	下半…砂岩の粟石 上半…片岩の割石	敷石か?
不明	不明	あり 詳細不明	3×1×2	不明	片岩の割石	不明

〔付編〕徳島県下の横穴式石室一覧

凡例　1．墳丘の数値は直径
　　2．石室の規模単位m
　　上段…玄室（長×幅×高）
　　下段…羨道（長×幅×高）
　　3．玄室のプラン
　　D型は段ノ塚穴型石室
　　4．参考文献
　　後述の文献目録の番号

徳　島　市

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
1	穴不動古墳	名東町1丁目	円墳 16 m	4.3×2.2×2.0 5.0×2.0×1.8	長方形 両袖		A 145，B 58，B 67 B 99，C 2，C 4
2	うばのふところ	名東町1丁目	円墳	4.8×2.2×1.15 2.3× —× —	長方形 両袖		A 41，A 254，B 58 B 67，B 79，C 4
3	山花古墳	国府町矢野奥谷64	円墳			鉄器7，仿製鏡1，玉類，須恵器多数	A 145，A 159，B 67
4	北山1号墳	国府町矢野奥谷68				金環2，銀環	A 145
5	北山2号墳	国府町矢野奥谷68				高坏	
6	北山3号墳	国府町矢野奥谷68					
7	北山4号墳	国府町矢野奥谷68		4.3×2.5×2.5 3.9× —× —			A 27，A 41，A 145 A 187，B 21，B 67
8	矢野の横穴式古墳	国府町西矢野山林39	円墳	3.8×2.4×2.5 4.2× —× —	長方形 両袖		B 69，B 78，B 79 B 93，B 99，C 2
9		国府町矢野奥谷69	円墳			紡錘車1，銀環2，管玉1	C 4
10	矢野城2号墳	国府町矢野奥谷114		5.0×1.0×1.3		埴輪破片	A 145
11	矢野城4号墳	国府町矢野奥谷116				須恵器，勾玉2	A 145
12	宮谷古墳	国府町矢野宮谷344				切小玉，須恵器	A 145
13	犬の仔山	国府町矢野宮谷441				須恵器，耳環	A 145
14	瀬口1号墳	上八万町瀬口	円墳 20 m	5.0×1.7×1.6 5.0×0.9× —	長方形 両袖	勾玉，土器	A 145，B 67，B 93
15	瀬口2号墳	上八万町瀬口	円墳 20 m	3.3×1.4×1.8 —×0.9× —	長方形 片袖	勾玉，土器	A 145，B 67，B 93
16	渋野古墳群	渋野町中渋野，渋田谷					A 145，B 96，C 4
17	かまとこ塚	大原町籠					A 145，B 96
18	野神さんの塚穴	入田町海見	円墳				A 44，A 145，B 67
19	内ノ御田2号墳	入田町内ノ御田	円墳				A 145，B 21
20	内ノ御田3号墳	入田町内ノ御田	円墳				
21	内ノ御田4号墳	入田町内ノ御田	円墳				

名　東　郡

22		佐那河内村根郷					B 67

名　西　郡

23	尼寺2号墳	石井町徳蔵行者堂下		2.60×1.80×1.65 3.10×0.9× —	長方形 片袖	須恵器	A 301
24		石井町鳥坂ひびき岩	円墳				
25		石井町石井前山2811				須恵器	

鳴　門　市

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
26	日出E号墳	瀬戸町堂浦日出 55の1	円墳				A 294 A 8，A 19，A 41 A 145，B 20，B 35
27	穴観音	大麻町大谷字山田59	円墳				
28	ぬかづか	大麻町萩原 字川原上10	円墳			馬鐸，玉類，刀，鏡，馬具	A 21，A 145，A 159 A 234，B 20，B 78 B 79
29	水車小屋古墳群	大麻町板東 字平草山神社	円墳			鏡，玉類	A 23，A 145
30	大塚	大麻町板東 字西平草66	円墳 60 m			直刀，勾玉，鏡	A 20，A 41，A 145 A 159

板　野　郡

31	犬伏塚穴	板野町犬伏字平山	円墳				A 19，A 27，A 145 B 20，B 95
32	坂口古墳群	上板町神宅 字大山坂口	円墳			玉，須恵器	
33	割目明神	上板町神宅字畑				須恵器	
34	向山	土成町高尾字向山2					
35	薬師穴	土成町土成 字南原美禄346					A 145，B 14，B 40 B 49，B 50

阿　波　郡

36	八坂神社古墳	市場町大字香美 字住吉本246	円墳			玉類，鉄器，土器	B 48
37	八ツ塚1号墳	阿波町字勝名北74	円墳		勾玉4，管玉1，切小玉1，小玉若干，金環2	須恵器	A 41，A 145，B 14 B 41，B 49，B 50
38	野神の土塚	阿波町字森沢125					B 49
39	小倉正広の塚	阿波町字小倉正広 784の2	円墳				B 25
40	桜の岡古墳	阿波町字桜の岡 385の1	円墳				A 39，A 44，A 145 A 163，B 14，B 49 B 50
41	北岡東古墳	阿波町字北岡115の2	円墳	3.0×2.1×2.2 41.7×0.8× —	D型 両袖		
42	北岡西古墳	阿波町字北岡74の2	円墳	3.87×2.08×3.12 1.96×1.34×1.70	D型 両袖	須恵器2	A 39，A 44，A 145 A 163，B 14，B 49 B 50

麻　植　郡

43	王子塚2号墳	鴨島町王子塚1366					
44	城が丸古墳	鴨島町向原244	円墳				A 145，B 80
45	三谷古墳	鴨島町三谷下山				須恵器（盛坏1ほか）	
46	日浦1号墳	鴨島町敷地日浦	円墳			土師器	A 145
47	西宮古墳	鴨島町敷地西宮	円墳		鏃手の刀1，鉄鏃1，鉄斧鉄板1，土器2，管玉2，勾玉2，小玉8，金環2		A 44，A 145，B 41
48	丸山古墳	鴨島町飯尾丸山	円墳				A 145，B 12
49	日浦2号墳	鴨島町敷地日浦				砥石1，須恵器	A 145
50	山王古墳	鴨島町敷地山王					A 145，B 6，B 80
51	東禅寺古墳群	鴨島町西麻植東禅寺				銀環2，勾玉2，鉄器，土師器	B 6，B 80

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
52	王塚古墳群	川島町 山田王塚	円墳			車輪石1，勾玉3	B 6
53	平山古墳群	川島町 山田平山69	円墳			須恵器	
54	平倉1号墳	川島町 山田平倉	円墳			須恵器	
55	平倉2号墳	川島町 山田平倉	円墳				A145
56	平倉3号墳	川島町 山田平倉	円墳				
57	平倉4号墳	川島町 山田平倉	円墳				
58	鷹巣古墳群	川島町 桑村鷹巣173	円墳 11m				A145, B 6, B 12
59	鷹巣1号墳	川島町 桑村鷹巣173	円墳				A145, B 6
60	鷹巣2号墳	川島町 桑村鷹巣173					A145, B 6
61	鷹巣3号墳	川島町 桑村鷹巣173					A145, B 6
62	挙入古墳群	川島町 学挙入	円墳			提瓶1	A 39, B 6, B 12
63	忌部山古墳	山川町 山崎忌部1115	円墳 7m	4.8×1.4×1.5			A145, B 6, B 12
64	無縁大師塚	山川町 西原59	円墳 8m				A145, B 6, B 12
65	金勝寺古墳	山川町 山崎村雲	円墳 6m	1.4×3.3×1.5		人骨，勾玉，丸玉，刀，土器	A145, B 6, B 12, B 28
66	境谷古墳	山川町 境谷	円墳	3.2×1.8×2.0 1.0×0.6×—		勾玉，丸玉，刀，須恵器	A145, B 12, B 60, B 78, B 79, B 91, C 3
67	西原1号墳	山川町 西原89				須恵器	
68	西原2号墳	山川町 西原113の					
69	新田谷古墳	山川町 新田谷24				刀2，勾玉，銀環，銅環，水晶玉，須恵器	
70	塚穴2号墳	山川町 大宗					
71	蔵池古墳	山川町 蔵池青木	円墳 10m				A145, B 12, B 28
72	境谷古墳群	山川町 境谷23				土器	
73	大神宮古墳群	山川町 西麓84の				勾玉，管玉，横瓶，坏，提瓶	A 47, A145, B 6, B 12

美　馬　郡

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
74	東拝原古墳	脇町 江原拝原 2473の2	円墳 14m	3.86×2.5×2.7 1.86×0.9×—	D型両袖		A145, B 4, B 38, B 55
75	中拝原1号墳	脇町 江原拝原1084	円墳	3.6×2.33×2.97 2.8×1.3×1.2	D型両袖		A145, B 6, B 38, B 55
76	中拝原2号墳	脇町 江原拝原 1085の5	円墳				B 4, B 55
77	北原古墳	脇町 江原拝原466	円墳 12m	4.1×1.3×2.6 3.5×1.15×1.3	D型両袖		A 41, A145, B 4, B 38, B 55
78	戎古墳	穴吹町 穴吹戎	円墳	3.82×2.40×1.86	D型両袖		A145, B 55
79	尾山古墳	穴吹町 口山尾山	円墳	3.82×2.32×—	D型両袖		A145, B 55
80	三谷古墳	穴吹町 三谷	円墳	2.02×2.01×2.34 2.6×0.84×—	D型両袖	刀，環10数個	A 41, A 44, A145, B 6, B 38, B 55
81	三島東古墳	穴吹町 三島	円墳	1.95×2.02×1.86 3.65×0.80×1.05	D型両袖	玉類	A 14, A 19, A145, B 6, B 55
82	三島西古墳	穴吹町 三島	前方後円墳	2.30×2.01×1.90 2.95×1.10×1.40	D型両袖 D型	玉類 玉類	A 14, A 19, A145, B 6, B 55
83	国中古墳	脇町 岩倉国中 2965の2	円墳	2.1×1.87×1.98	D型両袖		A145, B 38, B 55

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
84	野村八幡古墳	脇町 岩倉宮ノ下414	円墳	3.85×2.40×3.05 5.10×1.40×—	D型両袖		A 41, A145, B 6, B 38, B 55, B 79, C 4
85	江ノ脇古墳	貞光町 江ノ脇	円墳	2.17×1.74×2.24 3.60×1.01×1.54	D型両袖	馬鐸，刀のツバ，直刀，須恵器，勾玉	A145, B 6, B 38, B 55, B 84
86	西山古墳	貞光町 西山	円墳	2.03×1.8×1.58	D型両袖	提瓶	A145, B 6, B 55, B 70, B 84
87	太鼓塚	美馬町 郡里坊僧	円墳	4.60×3.40×4.20 8.50×2.35×2.10	D型両袖	須恵器	A 6, A 19, A 39, A 41, A 44, A 60, A 61, A140, A145, B 6, B 38, B 49, B 54, B 55, B 58, B 60, B 78, B 79, B 97, B 98, B 99, C 4
88	棚塚	美馬町 郡里坊僧	円墳	4.50×1.95×2.80 4.15×1.20×—	D型両袖	須恵器	
89	真鍋塚	美馬町 郡里宗重	円墳	5.90×2.15×2.30 —×1.35×—	D型両袖	須恵器	A 19, A 41, A145, B 6, B 54, B 55
90	鍛掛古墳	美馬町 滝ノ宮	円墳	3.0×1.5×—			A145, B 54, B 55
91	願勝寺1号墳	美馬町 中山路	円墳	1.6×1.9×— 3.0×1.5×—	長方形両袖	鉄器，刀ほか15，玉類40，銀環6，須恵器	A312, B 6, B 54, B 55
92	荒川古墳	美馬町荒川	円墳	3.45×2.60×2.75 5.30×0.90×—	D型両袖		A 14, A 19, A145, B 6, B 8, B 38, B 55
93	海原古墳	美馬町 西荒川86	円墳		D型両袖		A 14, A 19, A145
94	平野古墳	美馬町 平野	円墳				
95	八幡1号墳	美馬町 八幡	円墳	3.85×2.25×2.50 1.90×0.90×—	D型両袖		A 14, A 19, A145, B 6, B 8, B 38, B 55
96	八幡2号墳	美馬町八幡	円墳	3.00×2.20×2.45 1.90×0.90×—	D型両袖		A 14, A19, A 39, A 44, A145, B 8, B 38
97	大国魂古墳	美馬町 城	円墳	2.15×2.3×2.1 2.2×0.95×—	D型両袖		B 38, B 55
98	小野天神古墳	半田町小野天神	円墳	—×2.33×2.16	D型両袖		A 10, A 14, A 19, A145, B 6, B 38, B 55

三　好　郡

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
99	大塚	三野町 勢力 2[illegible]塚	円墳				A145, B 15
100	妙見七夕塚	三好町 大字昼間 字妙見					A145, B 15, B 61
101	円通寺塚穴古墳	三好町 大字足代 字塚穴				須恵器	A145, B 61
102	西成行古墳	三好町 大字昼間 字西成行					B 15, B 61
103	京石塚	三加茂町 西[illegible]1の1	円墳 5.50m				B 15
104	西山塚	三加茂町 西山298	円墳			長頸壺1	
105	新田塚	三加茂町 山口2078	円墳 7m				A145, B 15
106	大塚	三加茂町 中庄2584	円墳 14.5m			須恵器	A145, B 15
107	門石塚	三加茂町 中庄285	円墳 15m				A145
108	丸山塚	三加茂町 中庄2603	円墳 15m				A145, B 15
109	宮西塚	三加茂町 中庄1147	円墳 14.5m			須恵器	A145

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
110	光吉塚	三加茂町中庄1123	円墳			須恵器	A 145
111	地蔵塚	三加茂町中庄1127	円墳 15 m			須恵器	A 145, B 15
112	天神塚	三加茂町中庄1133	円墳			須恵器	A 145, B 15
113	秀森塚	三加茂町中庄1094	円墳 15 m				A 145, B 15
114	秀森北塚	三加茂町中庄1087 1088, 1089	円墳 14.5m			須恵器	A 145, B 15
115	雨ヤドリ塚	三加茂町山田20	円墳	3.8 ×2.0 × —		須恵器 銅器2	A 145
116	山添三谷の塚	三加茂町山田 27の1	円墳 13 m			刀1, 須恵器	A 145, B 15
117	山田塚	三加茂町山田73の2	円墳			玉類, 須恵器	A 145, B 15
118	井関の丸山塚	三加茂町山田9	円墳	3.0 ×1.2 ×1.5		須恵器	A 145, B 15
119	出口塚	三加茂町山田50	円墳 5.5 m			須恵器	A 145, B 15
120	冠懸塚	三加茂町冠懸40	円墳 15 m			須恵器 炭化物	A145, B 15
121	大塚	三加茂町冠懸28	円墳	3.0 ×1.5 ×1.5		須恵器	A 145
122	塚穴	三加茂町山の上3544	円墳			須恵器	A145, B 15
123	天神塚	三加茂町貞広4777	円墳 20 m				A145, B 15
124	天神北塚	三加茂町貞広2470	円墳 12.5m				A 145, B 15
125	貞広塚	三加茂町貞広 4785の2	円墳 10.5m			須恵器	A145, B 15
126	雀塚	三加茂町貞広4797	円墳				A145, B 15
127	うきすの石屋	三加茂町重高116		4.45×3.30×1.20			A145
128	八幡神社古墳群	三加茂町中庄 八幡神社付近					A 145, B 15
129	極楽寺古墳群	三加茂町山田 極楽寺付近					A145, B 15
130	お塚	池田町字ヤマダ 327の2	円墳 5.45m				A 145
131	お塚さん	池田町字ヤマダ321	円墳			須恵器	A 145, B 15, B 77
132	山田	池田町字ヤマダ 836の1	円墳			須恵器	A 145
133	供養地塚	池田町字ヤマダ408	円墳			須恵器	A145, B 15, B 77
134	御塚様	池田町字島760	円墳			須恵器	A 145, B 15, B 77
135	山伏塚	池田町字池南1987	円墳	2.0 ×1.2 ×1.2		須恵器, 勾玉 管玉	A 145, B 15, B 77
136	山伏塚	池田町字シンヤマ 3749の2の1の1	円墳			須恵器	B 15, B 77

小松島市

137	弁慶の岩窟	芝生町字大撫8の2		5.8 ×2.0 × —	長方形		A 11, A 44, A 145 A 160, B 35, B 38 B 42, B 58, B 81 B 96

阿南市

番号	名称	所在地	墳丘	石室の規模	玄室のプラン	出土遺物	参考文献
138	学原剣塚古墳	学原町字深田10				太刀, 刀子, 勾玉, 釘, 金環, 鉄鏃, 須恵器	B 88, A190
139	八幡山3号墳	長生町宮内字間谷 445の1					A 145, A 183, B 38 B 88
140	皇子山1号墳	日開野皇子山736					A 183, B 33, B 88
141	皇子山2号墳	日開野皇子山736			片袖		A 145, A 183, B 17 B 33, B 58, B 88
142	皇子山3号墳	日開野皇子山736					A 183, B 88
143	舞子島1号墳	椿町舞子島1		2.40×1.40×1.50	長方形		A 183, B 17, B 33 B 35, B 65, B 78 B 79, B 88
144	舞子島2号墳	椿町舞子島1		— ×1.25× —	長方形		
145	舞子島3号墳	椿町舞子島1					
146	舞子島4号墳	椿町舞子島1					
147	舞子島5号墳	椿町舞子島1					

那賀郡

148	観音山古墳	羽ノ浦町大字中庄 字千田池33	円墳	4.4× 2.2× 2.1 3.0× 1.2× 1.4	長方形 両袖		A 29, A 44, A 145 A 183, B 26, B 33 B 63
149	能路寺山古墳群	羽ノ浦町大字宮倉 字背戸田2の1					A 183, B 26, B 33 B 63
150	寺田山古墳群	羽ノ浦町大字宮倉 字頭田19の2					A 183, B 26, B 33 B 63

海部郡

151	大里第2号墳	海南町大字大里 字浜里33の4		5.25×1.80×2.25 4.70×1.50×2.00	長方形 片袖	須恵器, 金環 鉄鏃	A 145, A 294, B 37 B 85, C 1
152	五反田古墳	海南町大字大里 字五反田		2.5 ×2.2 ×1.5		須恵器	A 145, A 294, C 1
153	寺山古墳	海部町大字野江 字寺山58				勾玉, 須恵器	A 145, B 22, B 33 B 92
154	宍喰古墳	宍喰町大字久保 字北田		50 ×2.3 × —		直刀2, 須恵器	A 145, B 22, B 30 B 33

文　献　目　録

A　天羽利夫「徳島県関係考古学文献目録」所収の論文・報告書

徳島県博物館紀要第２集　1971年 参照

B　市町村史・通史関係

1　阿波志（佐野山陰）　1815年
2　入田村史　1913年
3　神領村誌（日浦善平）　1915年
4　美馬郡郷土誌（笠井高三郎）　1915年
5　答蔵村誌（田所左源太）　1916年
6　麻植郡郷土誌（久保忠男）　1917年
7　佐馬地村誌　1917年
8　重清村誌　1917年
9　山城谷村史　1918年
10　阿波郡大俣村誌　1919年
11　一宇村誌（西内滝三郎）　1920年
12　麻植郡誌　1922年
13　宍喰村誌　1923年
14　阿波郡誌　1924年
15　三好郡志（田所市太）　1924年
16　相生村史（前田実男）　1925年
17　宮岡町志　1925年
18　三岐田町史　1925年
19　新野町史　1926年
20　板野郡志　1926年
21　名西郡志　1926年
22　海部郡誌　1927年
23　大津村誌　1927年
24　川田町史　1928年
25　伊沢村史　1928年
26　羽浦町史　1928年
27　斎津村誌　1929年
28　山瀬町史　1930年
29　坂野村史　1930年
30　続宍喰町誌　1931年
31　名東郡加茂町誌　1933年
32　八万村史　1935年
33　立江町史　1935年
34　日野谷村史（田所市太）　1936年
35　川内村史　1937年
36　下分上山村史（田所市太）　1940年
37　下灘郷土読本（笠井藍水）　1949年
38　半田町史（逢坂左馬之助）　1950年
40　土成村史　1951年
41　久勝町史　1952年
42　小松島市史　1952年
43　横瀬町史　1952年
44　井内谷村誌　1953年
45　佐古郷土誌　1954年
46　加茂谷村誌　1954年
47　中野島村史　1954年
48　市場町史続編　1955年
49　林　町　誌　1955年
50　八幡町史　1955年
51　高原村史　1956年
52　大俣村誌　1956年
53　徳島県那賀郡福井村誌（原田一二）　1956年
54　郡里町史　1957年
55　新編美馬郡郷土誌（笠井藍水）　1957年
56　日和佐町郷土誌（笠井藍水）　1957年
57　応神村郷土誌　1958年

58　徳島市誌　1958年
59　赤河内村郷土誌（笠井藍水）　1959年
60　山川町史　1959年
61　三好町誌　1959年
62　高川原村史　1959年
63　趣味の郷土　羽ノ浦町　1959年
64　西祖谷山村史　1959年
65　新野町民史　1960年
66　神領村誌　1960年
67　名東郡史　1960年
68　三縄村史　1960年
69　山城谷村史　1960年
70　貞光町志　1961年
71　下分上山村誌　1961年
72　脇　町　誌　1961年
73　祖島村史　1961年
74　木頭村誌　1961年
75　海南町誌　1962年
76　国府町郷土資料　1962年
77　池田町誌（天羽五百枝）　1962年
78　徳島県史　普及版　1963年
79　徳島県史　1964年
80　鴨島町誌　1964年
81　小松島市古代文化のあと　1964年
82　浦庄村史　1965年
83　藍住町史　1965年
84　貞光町史　1965年
85　海南町史　1966年
86　佐那河内村史　1967年
87　松島町誌（児島忠平）　1967年
88　阿南市史（沖野舜二）　1968年
89　三名村史　1968年
90　桑野村郷土誌（西崎憲志）　1968年
91　美郷村史　1969年
92　海部町史　1971年
93　名東郡史続編　1971年
94　木屋平村史　1971年
95　板野町史　1972年
96　勝浦郡志（復刻）　1972年
97　沖野舜二『徳島県の歴史』
　『郷土の歴史四国編』宝文館　1959年
98　岸本実『徳島の歴史』世界書院　1962年
99　福井好行『徳島県の歴史』
　山川出版社　1973年

C　その他の論文・報告書

1　岡田一郎『大里古墳』　海部郡教育研究所　1953年
2　天羽利夫「終末期の古墳二基」『館報14号』徳島県博物館　1971年
3　森浩一・辰巳和弘「徳島県山川町旗見窯跡調査報告」『若狭・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告　第４冊　1971年
4　古墳研究班「徳島市内の古墳研究」『城東郷土研究』第２号　徳島県立城東高等学校郷土研究部　1973年

徳島県博物館紀要

第 4 集

昭和48年3月27日 印刷
昭和48年3月31日 発行

編集・発行 徳島県博物館
徳島市西山手町1丁目

印刷所 原田印刷出版株式会社
徳島市西大工町4丁目

2001年3月31日 複製
徳島県立博物館
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県文化の森総合公園内
TEL (088) 668-3636 FAX (088) 668-7197